

9  
41

ジヨン、フェイスク著

田中達譯

# 神の觀念

東京  
教文館

97-411

シヨン、フイスク著

田中達譯

# 神の觀念

東京教文館



## 序

著者ジョン・フイスク氏の經歷と立脚點とは、此の書の前篇「人の運命」中に叙述し置きたれば、今贅せず。就て一讀あらんとを望む。只此書を讀むにも、神學者の説を讀むの思ひを以てせざらんと、余の此にも反覆し置かんと欲するところなり。

自序廿二頁より廿三頁に涉れるゲーテの詩は、左の如く譯して大過なかるべきか。

世界の靈よ來りて我等に透徹せよ！

さらば世界の精神その者と格闘するは、

我等が能力の榮務となる。

助力を與ふる善き精神や、

静かに指道する高き先輩等は、

既往及び現在に万物を造りし者へと案内す。

本書の綴篇とも見るべきもの、尙ほ「自然より神へ」「永生」の二書あり、  
機を見て、譯出するとあらん。

明治三十九年十月

田 中 達 識

## 自序

余のコンコルド哲學々校に第二回の講演をなすべき乞を受くるや、喜んで之を承諾せり。是れ余が兼ねてより有神論に關して言はんと欲せしところを言ふの好機を得たりと思ひたればなり。而して余の講演は、凡神論なるもの果して近代科學の當然の結果なるや否やを論ずるの主意なりしが、此の目的を達するには一面、既往に於ける有神説の諸變遷を評説し、又他の一面には將來近代科學長足の進歩と學界に大革命を惹き起せる進化論の確立を切り抜けて生存すべき有神説の如何なるものかを指摘するに如くはなしと思へり。斯くの如き理由なるを以て、余は本書中に進化論の素養ある人々の定めて懐抱すべしと思はるゝ、有神説の梗概を叙し、斯くの如き有神説に冠するに凡神論

てふ名を以てするの適否如何は、余之を他日の議論に譲り置けり。夫れ細心に或る哲學的議論の骨子を叙することは、多少啓發の功なきにあらず。されど單に之に短評を付するが如きは、何の功でもあることなかるべし。換言すれば、『凡神論』といふが如き茫漠沒意味の學語に關する議論をなしたればとて、余の議論は何の益をだも得ることなかるべく、却て五里霧中に入るのみならんとは余の感じたりし所なり。然るに世人往々、的確精密に考慮するの勞を忌み、斯る面倒を避くるためにとて、好んで斯る汎意の語を用ひ、以て周到細緻の工夫に代へんとす。その結果や意外の結論を惹き起すこと尠からず。例せば、人若し或る學者の『不可識論者』と稱呼せらるゝを聞けば、我既に余蘊なく此の學者のことを知れりと思ふと雖も、實は不可識論が、此人の意見、此人の心術の特徴を顯すに足らざるを承知せざるの類なり。今夫れコン

トとマンセルとハックスレーとを一括して、之に適用し得るの語は、定義としては、其用極めて乏し。されど或は言はん、此の三人の相違は、甚だしかるべしと雖も、神の性質に關して何事も知るを得ずとの一點に於ては、其の意見相符合するものにあらずやと。曰く、或は然らん。(此問は極めて明白のものながら、此の問題にすら人尙ほ無條件的に然りとのみは答ふる能はず)。よし亦其の不得知の一點に於ては、全然同意見なるにもせよ、此の不得知に關する彼等の哲學的態度といひ、又此の斷定の應用といひ、又彼等が是れより推度して諸他の事を斷定するの方式といひ、その相違は天淵音ならず。然るを若し此の三者に『不可識論者』てふ語を冠して、自ら満足せんとするが如きことあらば、用語の上より心的混亂を生ぜざらんとするも得べからず。『凡神論』てふ語の場合にありても亦然り。慣例上種々の全然異なる學派に汎用せら

る、より、今や殆んど其語の眞意如何をも知るに苦しむに至れり。「凡ての有限物は幻影のみ。また此世は懊惱のみ、謬想のみ、錯誤のみ、絶對者の掀翻のみ」とする「印度の正統波羅門教の哲學」も、汎神論と稱せられ、又「之が正反對にして、宇宙は完全の理性の所産にして、絶對の意義に於て善なり」と主張する(ポロツクの「スピノザ」三百五十六頁より引用す)ストア派の説も汎神論と稱せらる。近頃に至りては、此語普通に譴責的形容詞として用ゐらるゝに至り、「無神論」てふ語は余り酷に過ぐと思はるゝ、不人氣の説に、無差別に之を冠するに至れり。若し平明なる學術語を用ゐて生理的に宇宙説を述ぶる學者あらんか、彼は必ず叱咤せられて無神論者よと呼ばるべし。されど之と同一の觀念を顯すに、或は嚴重の口吻を用ゆるか、或は詩的の文辭を以てする人あらば、其人はやゝ穩かに、「聊か汎神論の臭味あり」と稱せらるべし。

然り、此の不幸の一語は、斯くの如くに茫漠捕捉すべからざる渾沌の中に投せられたり。されど尙ほ此中より、一定の意義に似たる何物かを抜き出し得ざるにあらず。之を最廣義よりいへば、我等が宇宙を思想し得る方法に三種あるものゝ如し。

(第一)我等は此の現象界を認めて、自体完全のものとなし、別に之を基礎的、包括的の或る原体に歸するの要なしと言ふを得べし。曰く、万物一として其の極始あるにあらず、又その極終あるにあらず。前生後續の諸の事件にも何等の戲曲的傾向あるにあらず。事々物々必ず之に遵由せりと見るべき法則あるにもあらず。此の宇宙間また道理の見るべきなく、其の是れあるが如きは、人間の妄想叨りに之を附與するのみ。又世界の出來事は能く組立てし戲曲の如くに、秩序的の進行を有するものにあらず。只その一往一來の狀に於て、チャンセー、ライトの所謂

る「宇宙的天候」なるものを成す而已。時に或は相結びて合理的外觀を呈することなしとせざれども、泛々轉々、全然是れ盲目的、全然是れ不合理的なりと。以上は是れ紛れもなき純粹の無神論にして、一箇の遍在力をも認めず。

(第二)我等また此の現象界を基礎的、包括的の或る原体に歸するにあらずんば、全然解釋すべからずとの意見を抱くを得べし。曰く、天地萬有は、或る遍在力の發現なり。されど此の遍在力は、何等の意味に於ても、人格者にもあらず、亦擬人すべきものにもあらず。只無始無終の大淵源にして、凡ての箇人は皆是れより發し、而して最後に至れば、亦之に歸し、之に吸收せられざるべからず。世界の出來事は、秩序ありて進行するに似たれども、敢て我等の認め得るが如き目的に向つて進行するにあらず。その進化の次第を見るに一點たりとも、目的學的と稱すべきも

のあるとなし。事物の始めと其の終りとは(即ちアルファたるものと、オメガたるものとは)單に是れ不可思議の本質、無形の虚空のみと。以上は、當然、凡神論と稱し得べき説なり。此説、遍在力なるものを認むといへども、それは畢竟萬有と異名同体なり。

(第三)我等また此現象界を神人同形的即ち擬人的の遍在力よし之を的確に概念するを得ざるにもせよの發現と認むるにあらざるよりは、之を解知するを得ずてふ意見を抱くを得べし。曰く、此の宇宙には眞の客觀的理性ありて存す。其の諸の出來事は、秩序ある進歩を示し、而して我等が測知し得る限りに於ては、此等の出來事は、人知をもて認め得る目標に向ひて進行す。即ち、進化作用其れ自らは是れ一大目的學の發展にして、我等有限の知識を以てしては、只その微かなる片影を認め得るに過ぎず。「宇宙哲學」第二卷四百〇六頁。成程我等が出來事と

出來事との繼續を見て、その中に存する戯曲的傾向を説明するは、眞に不完全のものゝみ。されど戯曲的傾向なるものありてふ根本的事實を知るには、少しも妨げなし。而して此の戯曲的傾向は、客觀的事實にて、若し之をその主觀的方面よりいへば、我等之を稱して目的といふと。以上の説は是れ即ち有神論なり。此説は遍在力を認む。而してその遍在力は、即ち活ける神の謂に外ならず。

此の有神論は余の自ら懷抱する説にして、本書に近代科學思想當然の結果として余の説明せんとするものなり。余はコンニールドより今回亦もや招聘を受けて、此の問題を再論すべき好機會を得しを喜ぶ。是れ前回この問題を論せし時には、充分領解せられたりしとも思はれざればなり。一千八百七十四年、余の『宇宙哲學梗概』を出版するや、本書中に論明すると均しき有神論の論明に努めたり。然るに慧眼博

識なる余の一友人は、『フイジカス』てふ匿名を用ひて、『有神論正議』<sup>カウチン</sup>てふ書を著し、余の説を批評して曰く、『此中余は有神論と無神論とに共通と思はるべき幾多の分子を發見し得るも、有神論特有の分子なるものに至りては、一も之を發見するを得ず』(百四十五頁)と。フイジカスが斯く有神論特有の分子を發見し得ざりし理由は他なし。余の説は、名は有神論なるも、實は此の有神論より一切の神人同形的觀念を抜き取るものと誤解せしと是れなり。フイジカス以爲へらく、是れ全然不法の所爲なりと。而して余も全然彼に賛同す。次に余の友フレデリック・ボロツク氏も亦之と等しくその好著『スピノザ』(一千八百八十年ロンドンに於て出版)の中に論じて曰く、『フイスク氏の説は所謂人格的の神てふ信仰を排し、また之に基ける種々の宗教的感情を排するものなり』(三百五十六頁)と。さて若し右の文にして、只その前



節のみに止まらしめは、余は暫らく我心を静め、此の「所謂る」てふ語に如何ほどの意味を含めるかと穿鑿したるならん。即ち余はアウガスチンやバレーの信じたるが如き人格的の神を排したりとの意か或はクレメントや、シユライエルマヘルの信じたるが如き人格的の神を排したりとの意か抑も亦此の兩者かど。されど此の文の後節を見れば、その答を知るを得べきに似たり。即ち余は全然有神論なるものを排斥し去れりとの意を含めるに似たり。

夫れ博識無私の二思想家が、斯くも堅く信じて余の地位を誤説せられたるを以て見るに、余は「宇宙哲學」中、充分の注意を以て此の問題を論明したるに拘らず、尙ほ他に説明すべきものありて、存するが如し。成程該書中に、一節若しくは數節を抜き取りて之を考ふれば、如何にも有神論を全然拒斥するに似たる句の是れなきにあらず。特に斯くの如

き句は、「神人同形的有神論」と題せる一章に存す。同章は蓋しバレーの意匠論の不充分なるを示し、又プラトン及びアウガスチンの説に基ける近代神學者の多數が懷抱せる人格的の神てふ觀念には種々の大困難あるを指摘するに力を致せるものなり。されど、余はその次の諸章に於て、全然神人同形的觀念を神の觀念より排斥し去らんとするは、到底不可能の事たるを言明せり。世には、人格者及び無限者なる兩觀念を一体のものとして考ふるは、不可能のとなりとし、此の困難を避くるために、神を「無限力」と言ひ做す人なきにあらず。是れ人類の意識てふ我等の觀念より得らるゝ表號に代ふるに、一般の勢力てふ觀念より得らるゝ表號を以てするものなり。此の計畫たる種々の哲學的、目的のためには、非常に必要のとなり。されど此に忘るべからざる一事あり、他なし、人格者に就ての我等の經驗は、之を無限者として思惟

するを許さずと雖も、勢力とても他の勢力によりて對峙せられ得るものなるが故に、勢力に就ての我等の經驗も、之を無限者として思惟するを許さずといふと是れなり。之に加ふるに、勢力てふ觀念は、畢竟是れ抵抗に克たんとするの舉を主觀的感念より概括せしものなるが故に、『無限力』といふも、『無限的人格者』といふも、その神人同形的の意味を含めるとは、双方全く相同じ。さて『宇宙哲學』に於ては、余は論ずらく、神は此世と共に存し、人は是れより免れん様なしと。又曰く、最深の意味に於ては、神の性質は、有限なる人類の得て知るべきにあらず。されど我等が思想の必要上、我等も眞實の意味を有する何等かの形に於て其の性質を表號せざるを得ざるに至ると。又曰く、我等は斷じて神の性質を物質的に表號すると能はず。専ら之を心的に表號せざるを得ずと。余は今こゝに其の論法を繰り返へすとをなさず、只その結論を擧

ぐるに止むる而已。而して其最後の結論(第二卷四百四十九頁)に曰く、我等は『神は勢力なり』といふを得ず。是れ此語は、余の故らに避けんと欲する盲目的必然てふ凡神的觀念を呼び起すものなればなり。而して我等は『神は靈なり』といふを得とはいへども、此時にも尙ほ此語の表號的性質を忘るべきにあらずと。されば、余が神の人格性に於ける信仰を是れより強く言顯さんとすれば、全く近代哲學上の用語を抛ち、而して純然たる神話を利用するの外はあらず。

余が進化論と兩立するものと思考する有神論は、之を一層完全に定義するの必要より、本書中、左の二點を擧げたり。第一は、神人同形的の有神論と、宇宙的有神論との世界開闢に關する態度の歴史的比較なり。特に基督教會内にありて、アウガスチンとアタナシアスとが異なる方式により異なる結果に達したるを比較對照せり。元來、余の稱して『宇

『宇宙的有神論』といふ一説は、是れ余の新發明にはあらず。その最要點に於ては、即ちアレキサンドリヤのクレメントを初めとして、レツシング、ゲーテ、シユライエルマツヘルに至るまで、古今の基督教諸國の諸大思想家の懐抱したりしものに相同じ。次に第二點は、余の『人の運命』てふコンコルド第一回講演より演繹せる目的學的の推論是れなり。今より一年前、該講演の發行せらるゝや、世目して余の態度に一大激變（即ち余は或る學說より他の學說に『改宗』せりと目せられたり）ありしものとせしは、余の喫驚せし所なり。抑も『人の運命』に於ける論法はその各部威な余の前著『宇宙哲學』（一千八百七十四年）と見へざる世界』（一千八百七十六年）とに於ける論法に基けるものなれば、その後に出でし該書が前著に同じからざる感觸を世人に與へたりしは、余の自ら領解に苦しみしところなり。されど、余の前著を研究せし諸氏にして、余

の態度に激變ありとせしものは一人も是れあらず。只斯く想像したるは、能く余を知らざるの人か、若しくは新聞紙ありたるのみ。此の故に余は下の如く推論せんとす、曰く、『人の運命』の多くの讀者は、余の前著を讀まざるがため之と比較するとをせず、只新聞雜誌の媒介によりて發生せし（その如何に發生し、又何故に發生せしかは天獨り之を知る）茫漠牽強にして余を誣いたる似而非議論と比較せり。此に於てか、余の議論には、激變ありしものとの感を生せしめたるが如し。されど、『宇宙哲學』の發行後、余の進化論と其の意義とに關する見解、何等の發展、何等の膨脹を見ざりしとすれば、是れ余の名譽にあらず。十年の久しき、斯くの如き問題をその心に蓄へて、一の新思想をも得ざりしとせば、哲學的能力の欠乏といふ外はあらず。但し余は前著の欠點に氣付かざりしにあらず。『人の運命』と本講演との目的は、幾分にて

も此の欠點を補はんとの意なり。その欠點とは他なし、進化作用進向の目標を解すると充分ならず、随つて進化論が宇宙に於ける人の地位に如何なる影響を及ぼすかを適切に説述するを得ざりしと是れなり。此故に『宇宙哲學』根本の要點には、何の變化をも加ふるを要せずと雖も、新たに一章を増して、造化の化工の當初よりの目的なる人類最高の精神性の發達を叙し、以て進化論が如何様に人類をダンテ及びアキナス當時の萬物の靈長たる舊地位に復せしかを示さざるべからず。コペルニカス以前の星學は、人類の住處を宇宙の中心に置くに於て、其の思想未熟なるを免かれざりしかど、ダーウインの生物學は、萬物をして今日あらしめし進化作用は、人類を以て其の最終事實とすといふに於て、著しく成功せり。されば、世界は人類のために作られしものにて、その最高最聖の諸性質を發揮するは、世界創造の目的なりとは、今日も

猶ほ古の如しと雖も、その意味の深くなりしことは、決して昔日の比にあらず。而して此の結論の根據とせる論法は、之を『人の運命』にも記述し、又本書の末章にも摘要し置きたる如くなるが、又、一として之を『宇宙哲學』中に發見すべからざるはなし。只余は、殆んど達せんとして、充分に達し得ざりしたため、該書中には、此の結論を摘要し、指示する能はざりき。斯くて此の結論は久しく余の意識の背景中に彷徨し居たる後、ち、二年前に至りて俄かに余の念頭に閃めき出でたるが、その鮮かさ、恰かも天啓を受けしもの、如くなりき。さて、宇宙に於ける人類の地位に關する進化論の意義に就ての此の結論は、『宇宙哲學』に論明せし有神説の欠點(即ち目的學的要素)を補ふに足れり。夫れ神に關する説き方次第にて、その説或は有神論とも見へ、或は無神論とも見ゆるは、勿論ながら、こは人類に關する説方にあり。

ても亦然り。事物の目的を知らんとするの念は、深く人性に其の根柢を有するものにて、此の念慮を満足せしめ得ざる程の有神論は、不具無効の有神論と謂はざるを得ず。余の「宇宙哲學」を著はすや、深く此意を体し、中に「パレー」の有神論に反對しては、「進化作用其れ自らは是れ一大目的學の發展にして、我等有限の知識を以てしては、只その微かなる片影を認め得るに過ぎず」といひしとあり。而して余の思想は全然、その然らざるべからずて、確信に傾き居たりしかど、さりとして、當時未だ如何様にして然るかを指示する能はず。随つて余は、右の如き單簡粗略の一語に筆を止め置きぬ。若し余にして當時己に之を發見し得たりとすれば、必<sup>し</sup>や、フイジカスの心にも、又ホロツク氏の心にも、宇宙的有神論なるもの、真相を全然悟らせ得たりしならん。

されど科學者或は問ふて言はん、足下果して何をなさんとせらるゝや。

我等が首尾よく十字街頭に葬り、杭に釘し付けしものと思へる幽霊的、目的學を再び地下に起さんとするか。「結局原因」は何の産出するところもなきものなるが故に、ペーコンが之を呼んで、石女といひしは、當を得たるものにあらざるか。更に又ハックスレーは、一層皮肉の言を用ひ、之を呼んで哲學の藝妓といひたるは、往々にして人を迷はすの故を以てにあらざるか。余曰く、然り。余はかの「神人同形的有神論」と題せし一章中、目的學的方式を非難し、又之に基ける有神説を非難し置きたるが、今やその中の一語たりとも、余は之を撤回せんとするものにあらず。研究の手段としては、目的學は、絶對に無益のものなり。否、有害のものなり。是れ不信にして、又學問を濫すものなり。されど純然たる科學的研究の結果として、宇宙の事々物々に瞭然たる戲曲的傾向あるを發見せば、強ひて之を認めざらんとするは、理りなきとなり。

されば余は『人の運命』を著はし、以て斯る戯曲的傾向の存在を證明せんとせり。勿論斯くの如き傾向は、狭き神人同形的意義にては、之を目的の表證と見るべからずと雖も、其の主觀的方面より見る時は、前にも言ひし如く、我等の稱して目的といふもの、外貌なりとす。故に宇宙には無限力を代表する理性の在る有りて、該無限力の心的のものなるを示すと同時に、我等は此の心性を我等の知れるが如き有限のものと同視すべきにあらず。即ち人の方式を以て、神の方式を付度すべきにあらず。使徒パウロ故に曰く、『孰か主の心を知し孰か彼と共に議ることとを爲しや』と(羅十一〇三十四)。

余がスペンセル氏の不可識論に同意を表するは即ち此の意義に於てなり。而して余の解釋と氏の解釋とが如何ほどの程度まで相符合するかは、余敢て之を言はじ。斯くの如き奥妙の問題に關しては、人各々自

ら己れの爲めにのみ説くを善しとす。然るに氏は其の近著『退化的宗教』の中に、本書と相同じき有神説の意義を含める句を用ゐて曰く、『萬物の源たる無限的永遠的の勢力』と。又曰く、こは『吾等の中にありて意識となりて湧き出でし』と同じ力なりと。是れ恰かも本書中に神とし認むると同じ力なり。余は謹んで『不可識』といふ言を用ゆるを避けたり。即ち本書の本文には一回だも之を用ゐたることあらず。不可識とは、只神の一側面をのみ代表するの語なるに、淺薄なる各派の學者之を以て神と異語同義なるが如くに思ひ做し、中古の煩煩哲學以來、世に其跡を絶たざる謔語の問題となし了れり。その最近の一例は、フレデリック・ハリソン氏が誤まつて之を批評と思ひ做し、又スペンセル氏がその貴重の時間を之に對する無益の答辯に消費せし憫然なる實驗論者の余孽是れなり。抑もスペンセル氏は、その著書の何れにも力

即ち全在者なるものを認め、『我等が肉体の生命も心の生命も共に有機的無機的の諸活動同様この力の運動なり』と論じたるが、ハリソン氏に至りては此の遍在者を呼ぶに『全無者』てふ名を以てし、又之を『人にも世界にも無關係なる對論上の公式』(その意義の如何を問はず)と断定し、之が禮拜者は定めて『嗚呼エックスよ、我を愛し、我を助け、我と汝とを一体ならしめ給へ』と祈るならんと愚弄せり。若し夫れハリソン氏の目的にしてスペンセル氏の神觀と宗教的態度とを誤説するにあらず、却て之を了解するにありとせば、ゲーテの左の警句よりも能く之を代表するものは他に是れあるを得ざるべし。曰く、

Weltsiele, Komm, uns zu durchdringen!

Dann mit dem Weltgeist selbst zu ringen

Wird unsrer Kräfte Hochberut

Theilnehmend führen gute Geister

Gelinde leitend, höchste Meister,

Zu dem der alles schafft und schuf

ハリソン氏は、『不可識』といふが如き語を弄ぶべきことゝなれるが故に、さては斯くの如き諧謔をも演せしなれ。されど斯くの如き不當の用途に充てられし此語は、若し適當に了解せられなば、有神哲學上、最高の價值あるものに相違なし。神自らは管に未知的なる而已ならず、又不可識的なりとは、スペンセル氏がその古今東西に冠絶せる心理的解剖のあらん限りの力を竭くして説明せられたる所なり。されど、こは氏によりて初めて發生せし眞理にはあらず。又ハリソン氏は之が證明は諸宗教の滅亡に同じとなすが如きも、是れ亦然らず。凡そ古代の基督教神學者中、アタナシアスよりも優れるものは鮮し。然るに同人

また神自らは不可識的にして、只キリストの化身に由り、人類に啓示せられしものとなせり。されば余が本書中に此の「不可識」てふ語を用ゐざりし理由は、その價值を認め得ざりしが爲めにはあらず。却てスベンセル氏が此の語を用ゆるより種々の曲説、愚論を産み出すを以て、たとひ此の語を用ゐざるも、尙ほ能く氏と同主意の説を主張し得るを示すは必ずしも無益ならずと信せしに由る。尙ほ此上の説明に至りては、余が曾て此點に關して記せし所を再記するに止むべし。曰く、「神は現象界によりて、人の意識に己れを顯はし給はざるよりいへば、之を不可識といふべし。又その斯く己れを顯はし給へるよりいへば、可識といふべし。その無限絶對なるよりいへば、不可識といふべく、その現象的發現の順序よりいへば、可識といふべし。又宇宙の秩序ある活動の一々に顯はれし力たる點よりいへば、可識なり。又我等が日々の行

動と纏綿し、我等が不朽不滅の幸福を保證する道德法の大淵源としては可識なり。されば、我等は探究によりて神を發見すると能はず、又その無限性を測量し、若しくは絶對知を揣摩すること能はずと雖も、知的動物、責任動物として我等が知らざるべからざるほどのことは、少くとも、我等之を知るを得べし。若し夫れ是れより以上のことを知らんと欲し、又知識の可能なる事情の下を脱せんとする人あらば、是れゲーテの所謂「鏡を見てその背後の物を見極むるため之を翻へす小童の智と相同じ」と『宇宙哲學』第二卷四百七十頁。

本書は『人の運命』の續篇と認めらるべきものなり。特に末章の論意が、該書を参考せざれば殆んど了解すべからざるが故に然り。而して二書を合一すれば、余が早晚基督教の真相に關して説かんと熱望する宗教論の梗概皆此中にありといふべし。斯る趣向は余が十四歳の時



臆ろげながら、念頭に浮び出で、而して當時、新英蘭に流行せし嚴正のカルヴァン主義の語にて之を思ひ廻らしたり。その後余の意見に多大の變化ありて、一千八百六十九年の秋には、趣向も粗ぼ定まり、當時「ナザレのイエスと基督教の設立」と題する書を著さんと計畫せり。是れ一方に於ては基督教と稱する種々の信仰種々の希望の自然的起源を叙し、又他の一方に於ては、宇宙に關する近代の知識、近代の學說が如何なる影響を此の基督教に與ふるかを叙せんとせしものなり。斯くの如き書籍は、歴史論と哲學論とを包容するものなれば、久しき時日の間に、種々の準備をなさざるべからず。随つて時々余の出版する他の書籍は、悉く之をこの複雑困難の事業の準備たる片手業と看做したり。斯くて余は此の宿志に關して常に注意を怠らざりしと共に、又特別の意義に於て、之に關係せるものを著作せしこともあり。就中、その歴史論

の小部分の梗概は、『見えざる世界及び諸他の論文』と題せる一卷中に收めし『歴史上のイエス』及び『宗教上のイエス』と題せる論文中に見へ、哲學論の大略は、幾分か『人の運命』と本書に之を掲載す。

余の一奇に感せしことは、『人の運命』の評論家何れも皆之を余が「コンコルド」講演の『改作増補』なりとせしこと是れり。此の妄評は、他の一層大切のことも、如何ばかり亂暴に批評するかを推知せしむるに足れり。『人の運命』は、コンコルドに於て、講演せし儘を印刷に付せしものにて、一言も加へず、一言も減せず、また一言も變更するところなし。而して本書に於ても、亦全く然り。

一千八百八十五年九月六日

ピートルシヤムに於て

著者識るす

# 神の観念

## 目次

- 一 神の観念を了解せられ易き様言ひ顯はすの困難……………一
- 二 近代知識長足の進歩……………二二
- 三 有神の観念の起因……………二七
- 四 一神教の發達……………三六
- 五 神は世界に内住すとの観念……………四五
- 六 神は世界より離れたるものなりとの観念……………五一
- 七 普通に宗教と科學の衝突として誤解せらるゝ兩觀念の衝突……………六一

八 神人同形説……………七五

九 意匠論……………八二

十 花の譬をもて時計の譬に代ふ……………九二

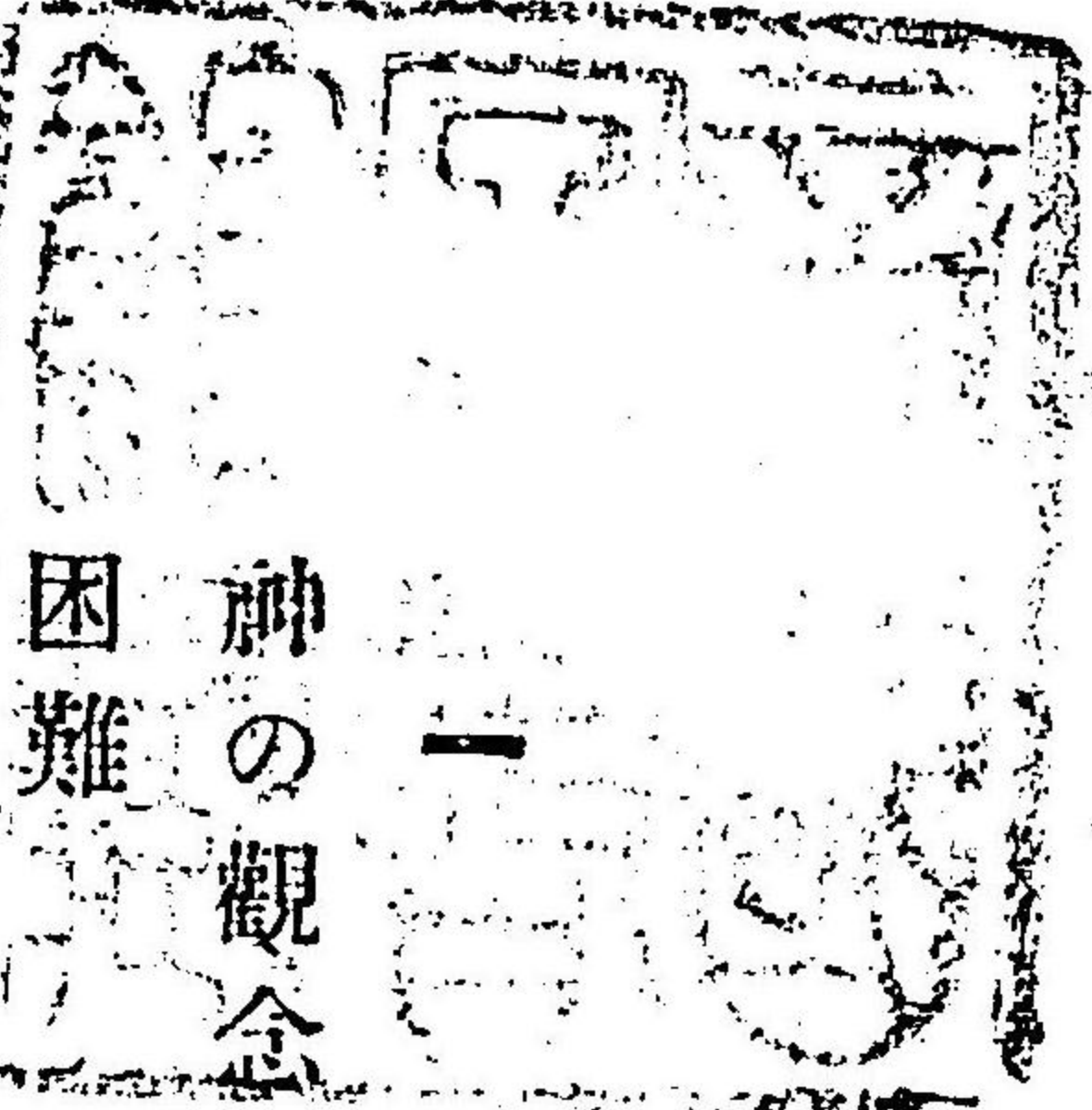
十一 結局原因を求む……………九七

十二 表號的觀念……………一〇四

十三 現象の永遠的淵源……………一〇八

十四 義を進捗する能力……………一二三

# 神の觀念



神の觀念を了解せられ易き様言ひ顯すの困難

ジョン・フイスク著  
田中達譯

ゲーテの名詩に、一タ、ファウストとマーガレットの一男一女或る園内を徜徉しつゝ、女が男にその宗教を質したる一條あり。ファウストは、此時までに懺悔をもなさず、彌撒にも參せざると已に久しかりしが、マーガレット之に問ふて曰く、「君尙ほ神を信するか」と。さて此の間に對

して單に然りと答ふるは易きとなり。但しその直接の問意に對して  
するにはあらざるなり。蓋し大學者たり、大思想家たるフアウストは、  
哲學坑の最奥所に掘り入りて、飽くまで貴重の鑛物を携さへ出でしも  
のなれば、其の神に關する觀念も、懺悔室や神壇の傍らにある神品の懷  
抱せるものとは甚しき相違あればなり。されど如何にして彼は此の  
觀念を己れと共に歩する一少女の單純なる心に領解せしめ得べきや、  
誰か我れこそは神てふが如き絶群無双の大觀念を解し得たりと放言  
し得るものぞ。而も亦人の感情を有するほどの人にして誰か合理的  
無病的の思索の必然的結果たる一信仰を放棄し得るものぞ。苟も蒼  
々の天、我等が頭上を覆ひ、堅實の地、我等が足を載する限り、又永久の星  
辰その大軌道を回轉し、愛郎の眼、その愛女の眼に無限の情を送り得る  
間は、げにフアウストの言へる如く、我等が心、万物を支持し、万物を包括

したまふものに對して、馳せ往かざるを得ず。我等或は世界万有の維  
持者に、思ふ儘の名を與へ、又思ふ儘に之を叙述するを得ん。而も永遠  
の事實は、我等の思慮に超越すると同時に、また最も明了、最も現實の事  
實として、依然存在すべし。或は之に命名し、或は之を叙述し、或は之を  
學理若しくは信條の法式に化するは、是れ却て其の榮光を掩ふものな  
ると、猶ほ煙霧が天の赫々を包む時と相同じ。されど、こはマーガレッ  
トの耳に快き響を與へたり。マーガレットは之によりて、其の曾て牧  
師より聞きしところを思ひ出しぬ。只その叙述の語句、いたく相異な  
れる而已。而もマーガレットはその心に尙ほ平かならず、安からざる  
所あり。蓋し彼は、領解に余れる絶大の觀念その念頭に存するがため、そ  
の心之が爲め麻痺したるなり。彼は容易く了解し得らるゝ、具體的の或  
る表號を必要としたるなり。又彼はフアウストがメワイストフェレス

より悪智慧を得つゝあるものならざるを望みたるなり。(マフェイスは  
フアウスト劇中の一人物にて意地悪るき誘惑者なり)

さて以上マーガレットの心を累せし困難は、獨り彼女のみならず、又幾  
多の聖人賢者が、宇宙の秘密を探り、その意味を知らんとして努力せし  
思想に逢着するほどの人の誰しも心に感ずる所なり。此の困難に累  
はさるゝほどの人は多く、而して之に勝つ人は幾許もなし。多くは、そ  
の生涯の間、神に關する一定の信條にて自ら満足し、その信條の範圍内  
に壓縮し得ざる凡ての觀念を無神のものとして貶黜する人なり。  
之を要するに、神の觀念は、宗教が年を重ねて、歴史的發達を遂ぐる間に  
幾多の禮典、幾多の教義を生出したるより、自ら曖昧、模糊のものと化す  
せり。斯くの如き禮典及び教義には、昔曾て絶美絶高の意義を有せしも  
あれば、恐るべく、近づくべからざる意義を有せしもあり。而して今日

も尙之を失はざるもの亦少からず。されど其の無意味なると有意味  
なるを問はず、人皆熱心に之を握りて放たざると、猶ほ遭難の水夫が  
死を免かるゝ唯一の手段として、堅く木片に縋り付けると同一の觀あ  
り。是等具体的の諸表號は、何れも皆幾多の論難攻撃の中を經來れる  
ものにて、今日にては殆んど宗教の要素なるが如くに看做され、新月や、  
安息日や、會議の決議、信仰箇條等は、却て活ける神の地位を奪ふに至れ  
り。斯くて此種の表號の價値を損ずる學說若しくは發見の出で來る  
とあれば、其の眞意は、如何ほど有神的なりしとも、宗教に反するものと  
認めらるゝと古今相同じく、之を把持する輩は、侮辱と迫害とを免かれ  
ず。されどこは事情應さに然らざるを得ざるとなり。凡そ教育不備  
の人には、神の行動を昔譚の形にて寫し出し、神は、人の目的を容れ、人の  
慾情に左右せらるといへば、その管に解せられ易き而已ならず、亦感動

せられ易く、能くその情感を警醒し、能くその心に訴へ、罪人には來らんとする怒りを恐怖せしめ、心痛者には樂しき慰めを與ふるの効あり。而して其の形は神話的なるにもせよ、又その語法は、文字的に誤謬なるにもせよ、實は非常に眞實非常に根據あるものたるに似たり。其の稗氣を帯べるほどに具體的なるところ、其の用語の普通人に鮮かに解せらるゝ點よりいへば、斯る神學説は、力あり、又眞なるものたるに似たり。之に反して、出来るだけ具體的表號の力を借るとをせず、以てその内に宇宙間に行はるゝ有りと有らゆる複雑の行動を包括せしめんとする神學説は、普通人には解せられ得べからず。而して其の解せられざるが爲めに、人の情感を警醒するとあらず。随つて、それは縦ひ今日人智の程度にて到達し得る眞理の最近點なるにもせよ、或は又その語法は、確かに宇宙の事實に基けるものなるにもせよ、非常に不眞實に、非常に無

趣味のものと思えざるを得ず。諸君若し蜜は甘しと言はば、最愚の農夫も尙ほ之を解し得べし。されど圓周の直徑に對する比は  $\pi \approx 3.14159$  なる公式にて之を顯はし得べしと言はば、謔言の如くに其の耳朵に響くならん。されど此の後者に含める眞理は、その前者に含めるものに比し、遙かに密に、その日常の一言一行と相關係す。只彼未だ之を知らざる而已。之と等しく、幼なき小供も、希伯來の燃ゆる柴の昔譚を不思議々々と感ずるほどに之を解し得べく、之に反してスピノザが能産者たる自然と所産者たる自然とにつきて論議したる際、その苦心せし諸大問題の性質如何に至りては、獨り純熟せる大學者のみ之を了解するを得べし。

斯る理由なるが故に、或は有形的宇宙の動作に現はれしものとして神を研究し、或は斯る研究に基ける用語にて、神の行動を形容せんとすれ

ば、よしや譏謗せられざるまでも、尙ほ激烈の批評を受けざるを得ず。若し夫れ解し易き公式に代ふるに、解し難き公式を以てするが如き人あらば、少しづゝ神の観念を磨消して遂に之を空虚ならしむるものと見らるべし。されば斯くの如き研究法の世人に恐怖せらるゝは勿論ながら、尙ほ此他にも一理由あり。曰く、神の行動に關する學說にして世人に正統説と認めらるゝものは、皆是れその前時代の父祖等より傳はり來りしものなり。而して此の學說は、元來知識の進歩に隨ひ顛覆又は廢棄せらるべき想像的事實に基きて構成せられたるものなり。學術若し一步を進むれば、我等は、稍別の見地より宇宙を観察せざるべからざるが故に、その各部の相互の關係は、斷間なく變轉すべく、我等が最初の世界觀及びその造主觀は、漸次に無意味、不満足のものとなり、我等が知識の組立とは、相應たがひしからざるに至る。是れ即ち舊説に拘泥せ

る人の警鐘を亂打するところあり。彼等は好んで我等を脅かし、一步を進めて新見地に到らざらしめんとして曰く、學術に注意せよ、その赫々たる發見と、冒險なる思辨とをもて、我等が靈魂の慰藉を刳掠し、我等をして神なき世界に居らしむるに至ればなりと。こは臆病にして優柔なる人々の古今となく叫び出す聲なり。而して彼等の此の心配は、全然別種なる思想家の行爲に由り、その證明を受くると尠しとせず。他なし。一方には、斯くの如く、科學は神を此の世界より排除し去るべしとて、戦々競々たる人のあると共に、又他の一方には、斯る時期の到着を翹望し、その待ち遠しく思ふの餘り、絶へず之を促進し、又此の時機已に來れりとさへ公言するものあると是れなり。然り、世にはメフイストフエレスより學ぶどころありて、『永遠たゞ否定を事とする精神』ある人もあり。又その心に『神なし』と獨語し、『野獸の如くに死せんと

するを以て自ら祝する「人もあり。或は天使すらも之に立ち入るを恐るゝほどの哲學の至聖所に侵入し、我等の宇宙觀を一變すべき學術の新發見を利用して之を唯物説の全勝なりと呼號し、此の全勝と共に無神論は萬民の宗教たるべき、幸福の日到着したりと揚言するものあり。されど慎重に證據を吟味し、公平に現象を研究するを目的とせる星學者、化學者、若しくは解剖學者は此の類の學究の説を恐れて、「主よ我友よ、我等を救ひたまへ」と祈るならん。

斯くの如くにして、從來科學者が新發見をなせる時、又彼等が神につき、靈魂につきて思想を發表せる時は、得て誤解を免かれざりき。かのガリレオ及びニュートンの當時に於て然り。ダーウイン及びスペンセルの當時に於ても亦然り。神學者はいふ、遊星若し重力と切線的動力とに由りて空に懸り、最高等の生物若し自然淘汰と適種生存とに由りて

發生するものとせば、宇宙は盲目的勢力によりて支配せらるゝものにて、神の必要あるとなし。是れ何等の不敬虔、何等の恐るべき思想ぞやと。是れと等しく、今日のラメトリたりピユツヒネルたる無神論者も亦いふ、宇宙は常に神なくして運行せり。此故に神なるものあるとなし。是れ何等の高尙なる、何等の愉快なる思想ぞやと。斯く彼等が何れも光を背にして相争ふ間に、世界は頓着なく益々大なる知識に進み、此等昧者の言に反して、其の信仰は依然變ずるとあらず。夫れ時間の織機は、出來事てふ無限大の布を織りつゝあり。而して其の一糸々々は神の活ける衣をして、愈々鮮明に眼に之を見ゆべからしむ。



## 二

## 近代知識長足の進歩

世界開闢以來、宇宙に關する人類の觀念の大變化を受けたるを、此の第十九世紀より甚しきはなし。知識増進の速かなる、前古未だ今日の如きはあらず。哲學的思辨の活潑に利導せられ、又その結果の廣く撒布せられたると、前古未だ今日の如きはあらず。抑も種々なる進歩的傾向が、一時は隠れて顯はれざりしに、遂に相合して、突然著大の變化を將來すると往々あるは、是れ有機的進化の通則なり。他語以て之をいへば、幾多の勢力、一時は靜かに一方にのみ集注し、機到れば即ち更に他の勢力の開き、突然として、新現象を發生せしむると、水の槽中に溜まり、て、其の溢れんとするに及び、水車に廻轉力を與ふるが如きは、

り。自然は成程飛び越ゆるとは無からん。されど以上述ぶるが如くにして長足の進歩をなすとあり。有機的發達の徑路には、宇宙の歴史の新篇章とも見るべき紀元の所々に存するは、蓋し此の方法に於てなり。彼の「アムステルダムはや」の如き「アムステルダムなめくじうを」の如き下等動物の共同祖先が、初めて椎骨の元形的痕跡を顯はしたる時代は、即ち斯くの如き紀元たりしなり。又初代兩接類の氣胞が、肺臟の務めをなし初めし時代も亦斯くの如き紀元たりしなり。又有機物の此の地上に發生し初めたる以來、其の最も大なる紀元といへば、自然淘汰作用の方針驚くべき變更をなし、人類即ち此の活舞臺に現出せる時代是れなり。斯くの如くにして、我等は亦人類の歴史の中にも、明かに長足の飛躍をなせりと見るべき時期を指示すると難からず。斯くの如き時期は即ち人類歴史の黎明を表するものにて、例せば幾年月間の混戦を重ね、遂に比較的鎮定の

狀に歸し、文書を媒介として、その思想と行爲との記録を子孫後裔に遺し初めたる時期の如きは是れなり。而して此の歴史の曙光以來、最も著大の紀元といふべく、又最も急速甚大の影響を人類社會に與へしものといはば、第十五世紀の海上大發見に初まりて、今日漸く其の極點に達せんとするものに如くはなし。此の近代的紀元は、其の初期にありては、單の知的功業として顯はれしが、其物自らも偉大なりとはいへ、その結果の偉大なるに至りては、如何なる放膽の夢想者も夢想し得ざりし所なり。所謂る知的功業とは、印刷術の發明の如き、望遠鏡と顯微鏡との如き、デカルトの幾何學の如き、ニウトンの星學の如き、ハイゲンズの物理學の如き、ハーヴェーの生理學の如きをいふ。斯くの如くにして人類の感覺は、其の記入の手段の完備に赴くに隨ひ、無限に膨脹せられ、その物理的推測を地より天に及ぼし得るに至れり。又初めて發光的依

的<sup>テ</sup>兒なるものを發見せしが、是れやがて顯微鏡の力も透徹し得ざる境域にある物質の内部構造を知るに至るべき緒なりける。斯る目覺ましき變化の著しくなり來れるは、是れ第十九世中となり。元來人智の學術的功業は、孤獨に起るものにあらず、必ずや甲乙踵を接すると、猶ほ強兵の組織あり、系統ある勝利の如し。即ち新發見の一々は、直ちに無數の實際家の手に渡りて、其の利器となり、年々宇宙の未知界の領土を割きて之を已知界に加へ來る。而して今日の時世は、もはや此の發見の續出に慣れ、人皆之を以て事の常經となし、其の心癡痺して却て其の眞意を味ふと能はず、之を例解として引用する人あるも、左迄に耳を聳つるとなきに至れり。昔しチブカドチザルの時よりアンドリュウ、ジャクソンの時に至るまでの運動學上の進歩は、之を鐵道創始以來僅々數年間の進歩に比し、言ふに足らざるものなるは、皆人の知るとこ

る。今日にありては、バック其の廣言に背かず、僅々四十分時に、帯を地球に廻らし得るに至りしが、我等之を見る時、かの紙鳶に電氣を捉へたる人の墓中に葬られし以來、未だ百年を經過せざるを忘るべからず。凡そ此等の事實を初めとして、客間の爐邊に飾られたる祖母の用ひし紡績車の教訓に至るまで、我等は之を心に記憶し置くを要す。昔しベキローブが紡輪竿を廻轉したる以來の變遷の如きは、今日の人々が一生の中に目撃せし變遷に比するも遙かに小なるものゝみ。斯る大變遷を惹き起せし機械學上の進歩は大に人類社會の政治的狀態をも變更せしめ、合衆國の如き大共和國も、第十八世紀の瑞典の如き小共和國同様、便利緊密、容易に之を統治するを得べし。又地上の一定區域内に棲息する人類の數は、非常に増加し、而して其の増加にも拘らず、人類の生命の價値は、大に増進せり。

上來述ぶるが如くにして、物理學上の原則を種々の工業に應用したるため、科學上の理論に暗かりし階級の人々も、日々複雑緻密の運用に慣れて、その思想の習慣著しく變更するに至れり。之と同時に、やゝ高等なる化學界及び分子物理學界等にありても、その進歩は筆紙に盡くすべからざるほどに廣大なるものあり。我等若しプリーストレーが酸素なるものあることを發見せし以來、その實用に供せらるゝまで、四時代を要せしを思へば、此の短日月の間の無數の化學上の發見に對しては、只愕然たるにあり而已。斯くして我等が得たる物質の分子的構造に關する知識のみにても、能く我等が從來の宇宙觀を一變せしむるに足れり。又分子物理學の事の如きも頗る驚くべきものあり。その他エチルギー存留説の如き、光、熱、電、磁の四は波動の狀同じからざる而已にて、能く甲より乙に變更し得べしとの發見の如きは、發見後未だ五十

年に達せず。物理的星學に關しても、一千八百三十九年までは、只太陽系以内にのみ限られ、海王星の發見せられし時も、ニウトン説は、未だ全勝を得しといふにはあらずりき。然るに今日にては、我等多くの星の距離と運動とを測量し得るのみならず、又分光器を用ひて、その成分を解剖するを得べし。我等が星界の發達を説明するに用ゆる星霧説が、初めてインマヌエル・カントによりて、提案せられたる以來、已に百年を過ぐ。されど星學者が一般に之を採用したるは、三十年以内のとなり。而して其健全の説なる證據多きが中に、今日の如き學問の進歩に拘らず尙ほ廢滅せざるは、其の最も著しき證據なり。次に地上に於ける變化の地質學的研究に就て言はん、サーチャールズ・ライエルが初めて地質學を科學的基礎の上に置ける書を出版せしは、一千八百三十年のとなり。又キエヴィエーが過去動物と現生動物とを分類し、以て

比較解剖學と古生學との基礎を定めしは、それよりも僅か以前のとなり。シユライデンとシユワンの兩人が細胞説を唱へ、初めて近代生物説を存在せしむるに至りたるは、一千八百三十九年にあり。而して胎孕學の科學的討究がフォン・パールによりて開創せられたるは、是れよりも僅か十年以前のとなり。かのダーウインの大發見たる自然淘汰説が、初めて世に公けにせられしより以來、未だ二十六年を経過せざるなり。直接に人類の進歩と關係ある學問に就て之を見るも、その進歩の割合は、亦同じく驚くべきものあり。人類の言語を科學的に研究するとは、一千八百〇八年、フリードリヒ・シユレゲルをしてアリヤン人種の諸國語の類同を探らんと發念せしめし時に初まるといふべし。此時よりして、今日のフイツク及びアスコリ等の研究に至るまで、その成功の量

は物理的諸科學のそれと相拮抗す。人類の元始的思想を明かにする比較神話の研究は、今日尙ほ老ひたりといふべからず。否極めて幼稚の狀態にあり。法律習慣の研究、政体、教會制度、工業制度の研究に比較法を應用するの舉は、創始以來未だ三十年に満たず。されど今日までに收め得たる結果は、我等をして、世々の人類の歴史を書き換へざるを得ざらしむ。その他考古學者の大功業は、埃及の畫文學及びアッシリヤと波斯の楔字の解讀といひ、舊き都市の發掘といひ、世界各國に於ける未開時代の器具及び工藝の發見分類といひ、殆んど皆第十九世紀に屬するものなり。凡そ此等の發見は、何れも皆歴史時期の長さを二倍ならしめたるものなるが、近代地質學が、古代溫帶地方の氷結に關して語るところと能く相符合し、略ぼ人類の年代及び、その地球上の播布に伴ふ諸事情を想察せしむるに足れり。斯くの如くにして我等は遂に、

星雲凝結の初めより今日に至るまでの創造史の概略を知り得たるに近く、亦此の既往進化の特徵より推測して、將來の傾向の大勢を幾分か窺ひ得るに至りたりといふべし。以上凡べての物理的、歴史的の知識は、人心の研究に影響するところ尠からず。論理學上の著述にありては、アリストテレスとホエツトレーとを隔つる二千年は、却てホエツトレーとミルとを隔つる數年間よりも僅少の進歩を見たり。心理學にありては、フエヒテル、グント、スペンセル等の著述皆是れ當代のものに屬し、昔しあらざりし所なり。我等若し此の諸功業に加ふるに、更に文學、美術、古語、聖書語、形而上學、神學等の批評的研究を以てせば、その總量は、殆んど想像に餘るばかり廣大なるものあり。或人當代を呼んで、鐵の時代と稱せしが、亦是れ觀念の時代と稱すべく、且つ求め且つ發見すると、今日の如く忙はしきは未曾有

といふべし。その壯觀は眞に是れ、人類が特殊の人類となりし時期を除くとするも、その他の諸時期をして顔色なからしむ。其の心的習慣よりいふも、其の研究方法よりいふも、其の研究問題よりいふも、今日の人類は、是れ學問の進歩と共に進歩するものなれば、之を一千八百三十年にその教育を終りし人に比するに、その懸隔極めて大に、是れより以前の進歩的人類とその前者との懸隔の比にあらず。即ち人類の知的進歩は、俄然否寧ろ突然、人類穴居の時代よりして我等の曾祖父の時代までに進みしよりも高地位にとは昇進せり。而して今日まで遅緩なりし進歩が今後は迅速ならざるべからざるは、此の高等なる發達の特質なり。今や人類の心は昔の如く頑固ならず。革新に抵抗すると、昔の如く甚だしからず。知的要求の増すと共に、又之が満足の途も次第に増加しつゝあり。されば我等が觀察し來りし功業は、廣大なるに相

違なきも、我等が知識の欠陥は、尙ほ驚くべきものあり。之がため、僅かに一問題を解釋し終れば、却て幾多の新問題を惹起し來るの奇觀あり。斯くの如き事情の下にありては、何事に關しても最終の鐵案を近き將來に期し得べきにあらず。思ふに、第廿一世紀の眼を以てせば、第十九世紀の科學の如きは、必ず零碎、幼稚のものと見ゆるならん。されど第廿一世紀及びその後の人々は、今日を顧みて、之を新時代の始めとし、人類の知的發達が、前時代を凌駕せんとするに到りし紀元の曉となすに相違なし。

以上舉げ來れる許多の新發見の必然的結果として、我等は、今日人類思想大革命の正中にあり。古來久しく敬重せられたる信條は、漸く人心にその根據を失はんとし、昔の諸表號は、其の價值を失墜し、何事も皆其實質如何を檢せらる。而して今日の議論は昔の議論とは異なり。即

ち最早解釋學上の問題にあらず。又教會と教會との微妙なる定教上の争ひにもあらず。宗教その物が何故、我等の信奉を要求するかとの問題はなり。或は神の存在を否定する人あり。或は人の靈魂とは種々なる物質の排置に伴ふ無常的現象の一群に過ぎずと説破する人あり。或は此の無神論者、唯物論者の立場を執らざるまでも、宗教は、事實上もはや人事と無關係のものとなれりと思ふ人あり。されば人間の作りし信條にして、今日の知識の諸要點と能く調和し得べきものとは、一も是れあらず。是れ人爲の信條は、何れも皆今日全く顛覆せられ、若しくは信用を失ひし昔の宇宙説を根據として構成せられたるに由る。此に於てか問題は起るべし。曰く、斯くの如き舊信仰廢滅の時代にありて、我等尙ほ、我等が宇宙觀の根據なる宗教的態度を維持し得る望み果して是れありや。我等が神を信するは、猶ほ我等が妖怪を信すとい

ふと同様、人類未開時代の夢にあらざるか。而して今日の科學は、妖怪の信仰を打破したると同様、神の信仰をも打破しつゝあるにあらざるかと。斯くの如き質問は、我等日常接するものにて、或は非常の氣焰を以て之を問ふもあれば、或は恐怖に満ちて之を問ふ人もあり。此の人々の所見を以てすれば、太古より人類の抱き居たる神の觀念と、近代發生せし宇宙説により影響せられたる神の觀念とを一々調査すると、無益にあらざるに似たり。我等未開時代の人類の抱きたる觀念中に、今日の知識に觸れて死滅せざる元素を發見するとあらば、此の觀念は即ち永久的のものにて、即ち永遠的實在に應ふるものと信するに於て、最強の理由を有すと言ふべし。されど未開時代より傳はり來れる神の觀念が厳しき修正を受くべしとは、何人も期待するところ。若し又觀念の最要點にして現代の特色たる知識の増加にも死滅せざるものたるを判

明せば、それは人類のあらん限り、死滅するとなきものたるを信するを得ん。蓋し今日以上の嚴密なる檢案を受くる時は今後またあるべしとも思はれざればなり。

此點は、神の觀念が今日までに如何なる修正を受けたるか、又舊知識と新知識との衝突は如何なるものを概示せば、一層明かなるものあらん。而してこは、我等の逐次論究せんとするところ、又その結論は、知識が如何ほど進歩したればとて、有神論の最要點は、斷じて動くとなしと言ふにあらん。

三

有神の觀念の起因

今、我等が議論の緒を解くには、有神の觀念の起因を尋ね、未開人種間に一般に顯はれたるその形式を探究するに如くはなし。さて此の觀念中に存する最も原人的の要素といへば、即ち我以外の或者に依頼するの念是れなり。我等の世界なるものは、我等の生命を支配して我等に服従の外なからしむる勢力を以て成立す。成程箇人は、その意思によりて、聊か事件の成行を變更し得ざるにあらず。されど之がために尙ほ嚴密に、不斷に少しも干渉するを得ざる權力に服従せざるを得ず。

若し此等外部的の權力に順應するを肯んせずば、我等は只死ある而已。又此等の諸勢力は、我等の生前よりあるものにて、我等の死後も尙ほ存



續するものなるは、我等の堅く諸の外物に就て信仰すると同様、我等之を信仰す。我は、我がために此の世界を作りたれば、我と共に生死するものと信ずる人は一人も是れあらず。却て人皆此の世界は、我以外に獨立し、我は之に來り、亦之を辭し去るべき或るものと思惟せざると能はず。又その來るも去るも、將た此世にある間、何事をなすにも、我以外の何物かに依頼すと思惟せざると能はず。

此の人生根本的の事實に關しては、古人と今人との間、小兒と成人との間に、別に意見の衝突あるとなし。成程原人は、斯くの如く一般的に此の事体を言明する能はざると猶ほ小兒が之を言明する能はざると同じかりき。されど此の陳述の主意は、今日の我等に當て符まると同様、原人にも亦當て符まれり(卷末の甲註を見よ)。原人は、今日の意義に於ては、此の世界なるものにつき何事をも知らざりき。我等の呼んで世界といひ、

宇宙と稱する勢力の大集合体に關する觀念は、是れ稍後世教育の結果なり。即ち幾多の經驗と回想とを重ねて初めて達し得たるものなり。されば斯くの如き觀念は、原人の地平線以外に屬し、隨つて彼は世界なるものを知らざりしかど、亦その幾分かを知り居たりしなり。言を換へて之をいへば、原人の世界は、渾沌的、零碎的の小世界に相違なかりしも、亦こは一點疑ふべからざる現實の世界なりき。原人は、生より死に至るまで、己れよりも遙かに大なる權力の支配を受けざるべからざるを知り居たりき。而して此の權力を説明し、又その行動を解知せんとするに、原人の有せし手段は、只一つ是れありたる而已。而して此の手段は、その用ゐざらんとするも得べからざるほどに卑近のものなりき。所謂原人唯一の手段とは他なし、即ち人の意思是れなり。此點に關しては、未開發人の哲學も、今日科學的思想家のそれと甚しき相違ある

にあらず。曰く、原人は己れの諸行動が欲望によりて促がされ、知力によりて指導せらるゝことを知り、而して又太陽も、風も、霜も、電光も同様なるべしと想像せり。又原人は、日常目睹する限りの外界の諸勢力を偉大のものとして擬人し、或は之と争はざるべからずとなし、或は之を宥めざるべからずとせり。此の原人的哲學は一時普く人類の間に行はれ、遙かに歴史時代までも繼續し、而して其の遂に高等なる文明人種に棄てらるゝに至りしは、眞に徐々たるものなりき。現に人類の過半を占むる半開人種は、尙ほ未だ全く之を棄つるに至らず。野蠻人の間には、尙ほ太古の儘に之を主張するを見るべし。希臘人、印度人、スカンヂナビヤ人、北米土人、南洋土人等の神話には、太陽を擬人して、弓手若しくは彷徨者となし、雲を擬人して、巨鳥となし、暴風雨を擬人して、大食なる龍となす。その他、鬼神の話、英雄の話、精霊、神仙の話等は、何れも自然神

話の断片曲解にて、長く忘れられたる其の原意は、近代學者の力により漸く恢復せらるゝを得たり。

歴史以前の人々が、斯く有形的諸現象を擬人するに就ては、思ふに人類最始の思辨たる幽霊説に助けられしと多かるべし。旅行者にして、全く宗教若しくは宗教と認むべきほどのものを欠く人種を見たりと報告する人時々是れあり。されど、幽霊の信仰なき人種を發見せるものは一人も是れあらず。蠻人の自然哲學たる種々の幼稚なる臆測は、人皆第二の自己、即ち幽霊を有すとの假定に基けるもの多し。「蠻人は此の第二の自己てふ假定に基きて、睡眠中、異郷及び異人の間に彷徨せしとを説明する」となるが、又此の假定に基きて、死して葬られし父母、友人若しくは敵に夢中に邂逅せしとをも説明す。即ち夢者の第二の自己は、其の亡兄弟の第二の自己に遇ひて之と會談し、相携へて狩獵をなし、

若しくは席を列ねて饗應に臨みたりと想像す。是れ即ち幽霊の住する世界ありとの信仰の起原にて、蠻人の經驗は皆この信仰を堅固にし、膨脹せしむるにあらざるなし。之を蠻人の無數の談説、無數の迷信に徴するに、第二の自己てふ假定は、歌私的里、癡癡、像影、音響、水中の影像等を説明するに用ゐらる。之に加ふるに、第二の自己を具ふるは、甞に人類のみならず。啞獸も、草木も、石斧も、弓箭も、衣服も、食物も、皆その幽霊を有す。而して會長の死して葬らるゝや、その妻妾、奴僕、犬馬等皆之に同伴するため殺戮せられ、武器、粧飾等も幽霊界に於て使用するため、その墓邊に安置せらる。歴史以前に於ける原人の埋葬を見れば、此の蠻人哲學の如何ばかり古きものなるかを知るを得べし。而して此の幽霊の信仰より一躍して或は風、或は電光を解釋し、之をその靈魂に動かされたる人と看做し、或は人類同様の慾情、目的を具へし人の所爲とな

すに至るは、蓋し自然の順序なり。即ち擬人の觀念は、幽霊の信仰の必然的結果にて、随つて、世界の人種残らず此の觀念を有したりしなり。或は大木を顛覆し、或は黒雲を驅逐する大權力は、人の靈魂に似たるものならざるべからずとは、是れ蠻人に避くべからざるの推論なり。例せば、火にして若しその茅屋を焼くとあらんか。是れ火が靈魂を具へし人にて我を怒るが爲めなり。之をして深切ならしむる爲めには、祈禱若しくは犠牲によりて慰諭せざるべからず。蓋し蠻人は、火の靈を人の靈に似たる或るものと認むる外、他に途なかりしなり。蠻人は、人の靈魂と、水火の靈との間に、何等の區別をもなさざればなり。斯くの如き原人的の理論よりして太古の宗教は發達し出でたり。所謂太古の宗教とは我等か今日判断し得る限りに於ては、即ち凡ての人類の間に行はるゝ祖先崇拜教是れなり。死せる會長の第二の自己

は、その死後尙ほ引續きて、種族の利益を保護し、敵の來攻を防ぎ、勇敢の戦士を賞し、反者と怯者とを嚴罰するものと想像せられたり。而してその寵眷を買ふためには、猶ほ臣下が活ける君主に服事する時の如き儀式を以てせざるべからず。若し或る怠慢或は不敬の所爲ありしとせば、敗戦、水害、火災、飢饉、疫病等は、皆その憤怒の結果として解釋せられたり。斯くの如くにして、自然界の諸勢力を動かす靈氣は、往々にして、祖先の靈と同物視せられしが、神話を見れば、此の混淆の跡尠からず。毘陀教には、父ピトとて人類の祖先等が、人類の高祖たる炎魔と共に空中に住し、日々風雨の事務に忙はしく、或は枯渴せる地を醫するため、雨を送り、或は地を早らせて五穀を枯死せしめ、或はウオダンの如き獵者を以て成れる軍隊の如くに迅雷烈風を送るとの話あり。太古の希臘人には、蒼天ウラノス、諸神と人類との父なりとの傳説あり。知るべし、

古代にありては、祖先崇拜と自然崇拜とを混淆したりしとを。而して或る場合には、國民的宗教の發達と共に、祖先崇拜獨り勢力を占むるに至ると、支那人日本人及び羅馬人の如きあり。又或る場合には、自然崇拜に基ける多神教、勝を制すると猶ほ印度人、希臘人、及び昔のチユートン人種の如きあり。されば希臘合祀廟内の諸大神は、皆是れ物質的諸現象の擬人にあらざるなし。稍後世に至りては、羅馬人等この諸神を採用し、之に對して、一通の尊敬を表せしが、その嚴肅至誠の禮典は、その家庭に祖先の靈を祭る時にありき。而して其の戰敗國民の諸神を遇するに好意を以てしたりしは、古代の地方的諸宗教互に搏噬し、遂に偉大真正の宗教に吸收せらるべき準備たりしなり。

## 四

## 一神教の發達

本書の説明中、右の如く羅馬人のとを擧げしは、全く無意味のとはあらず。抑も眞箇の有神的觀念が太古の渾沌的、零碎的なる幽靈説や自然崇拜等より生出したるといふは、幾分かその政治的境遇の然らしむる所なり。神てふ觀念の如き最も偉大の觀念を構成するは、是れ人類の一朝一夕に能くし得るところにあらず。而して自然崇拜や祖先崇拜の如きは、之を有神説とは言ひ難し。但し斯る原人的の宗教が己れ以外の或る者に依頼するを認めしを以て見れば、その中に有神論に達すべき萌芽ありしを知るべし。されど幽靈を宥め、日の出を禮拜するより進みて、天地の創造者たり、我等の其中に活き、動き、又有るを得る

無限永遠の神の禮拜に達するは、其途近しといふべからず。即ち人類は此の觀念に達するに先だち、豫め天と地との多少精確なる觀念を得ざるべからざりしなり。換言すれば、たとひ不精確にもせよ、一通り宇宙觀を構成すべき必要ありたるなり。げに此般の宇宙觀には、基督紀元前、己に或る文明國人等之に到達し、中にも希臘人は、物質的現象の概括と説明とに驚くべき端緒を開けり。基督紀元前二世紀より同紀元後三世紀に至るまでのアレキサンドリヤの知的空氣に至りては、ペーコン及びデカルトに至るまでの間の何事にも優りて大に近代的なるところあり。又アナキサゴラス以後の希臘思想界の諸大家は、陰に陽に一神家ならざるなし。斯く自然的現象の概括せらるゝと等しく、此の源と看做されたる神即ち超人的存在者も亦概括せられ、而して此の自然觀は、一神觀の基となり、此神を目して、自然界の創造者また統治者

となすに至りぬ。されば其の發生の順序を以てすれば、此の神は亦心的屬性を具へし神たるべく、而して多少人に類せしものと看做さるゝに至るべかりしなり。

されど人心を導びきて一神説に傾かしめたるには、此の科學的概括のほかに、尙ほ一原因あり。祖先崇拜の最も著しき特色なる鎮守神てふ觀念は、直接に古代諸國民の政治的發展により其の影響を受けしといふと是れなり。即ち種族の結合して國民となりしと共に、種族の鎮守神も亦概括せられ、若し然らずとするも、或る重なる種族の神が、他種族の神を壓倒し、最初は唯最大神とのみ認めらるゝに止まりしも、後には、唯一の神として、その國民の神となれり。此の發達の方式の最も著しき一例は、希伯來人のエホバ的觀念に由りて之を見るを得べし。舊約書によりて考ふるに、希伯來人の宗教の最も原人的なるは、拜物教即

ち最も幼稚なる多神教にして、その中には自然崇拜よりも、祖先崇拜の分子著るし。最初はテラビム即ち家族的の鎮守神、要地を占め居たりしも、パールパールの如き、モロクモロクの如き、アシタロテアシタロテの如き自然神も亦普く崇拜せられたり。その他天地の創造者は複數の諸神諸神にて、其の子等は、洪水前の人々の娘を訪ひつること聖書に記されたるが如し。鎮守神エホバエホバも最初は、諸神諸神の一と思ひ做され居たりしも、次で諸神中の首長となり、天の萬軍の主となれり。而して其の撰擇にかゝる預言者は、その眷顧によりてパールパールの諸預言者を壓服し、斯くてエホバは、隣邦諸神中の最大のものとなり、亦た唯一の眞神となり、遂には唯一の神と思ひ做さるゝに至り、其名は一神教の表號となりぬ。夫れエダヤ人エダヤ人は古へよりして、全世界屈指の知能高き國民なりき。彼等は太古已に熾烈なる愛國心を養成し、その倫理的感念の熱くして且つ深かりしと、万國の民に

超えたりしなり。かの預言書の中に顯はれたるエホバ觀の如きは、キリスト以前諸國の人の到達せし神の觀念に比して最も高し。而して其の倫理的價值に於ては、希臘及び羅馬の合祀廟中に發見せらるゝ何物にも遙かに超越せり。されば斯くの如き神の觀念が羅馬全帝國に採用せらるゝに至りしこと、蓋し自然の勢たりしなり。キリスト紀元の當初には、希臘羅馬の多神教、殆んど人心にその根據を失ひ、只一編の美譚集として文學上、その價值を有せしに止まり、次第に下落して遂には、俗傳たらんとする傾向あり。されば人民皆何事か、より善きものを得んとの念急なりしが、僅かに東洋風の儀式を一層絢爛ならしめ、若しくは在來の祖先の靈を祭る宗教を得て之に満足せり。而も彼等の心は、己に一神教を受くるに充分の準備成り居たるにて、猶太思想をして普くこゝに行はれしめんとすれば、只國民的限界を撤回し、エホバは

宇宙の主宰、万民の父なりと云ひ弘むるを必要としたりし而已。而してイエスとパウロとは即ち之をなせり。四福音書と書翰との中に包容せられたる神の行動に關する説は、蓋し人類の初めて到達せし完全の一神教にして、少くとも今日の文明國民の祖先等の到達せし完全の一神教なり。此に至りて神の觀念は、初めて古代の國民的宗教の通弊たる境遇上の制限を脱するに至りしが、是れより先き、之と同様の眞正なる觀念に到達せし思想家、彼處此處に無かりしにあらず。例せばクレアンセスの莊重なるゼウス讚歌中に顯はれたる思想、即ち之を證す。されど平民をも哲學者をも均しく同意せしめ、以て万民の心を開かしむる一神説は、即ち之を以てその嚆矢とす。而して此の一神説が短日月の間に廣く採用せられ、其の人心に卸せる根柢をして、容易に覆へすべからざるものたらしめしは、イエスの述べ給ひし妙に美はしき

倫理教是れなり。此の倫理教は屢々誤解を受けたりと雖も、是れ深き眞實の教にして、人類がその野獸性を脱却し、争鬪悲哀全く鎮定すべき時の曙光なりける。

イエスとパウロの有神説が其の根本的特徴に於ては、眞實にして人類のあらん限り繼續すべきものたるは、我等後ちに至りて之を論ずることあらん。その陳述法の變更は、その外観に變更を來すことなしとせざれども、眞理の精髓は、長く同一たるべきなり。されど基督教と稱せらるゝ變遷的の一教義は、此の純粹なる有神説にあるべからざる分子を含み、随つて長く人心に其の根柢を有するを得ざりしこと往々あり。元來多神教より一神教への變化は、一朝一夕に完了せらるべきものにあらず。即ち基督教の羅馬帝國に傳はるや、異教的觀念と儀式とに浸染し、チュートン蠻民感化の時にも、之と同様の順序を経たり。クリス

マスの如き、イーストルの如きは、是れ直接に、古代の自然崇拜より傳承せるものなり。家族的鎮守神の禮拜は、護身聖徒の禮拜に尙ほその跡を止むといふべく、ベレンシンス人の聖母禮拜は、處女マリヤの禮拜に繼續せられたり。かのチュートン國民が神を呼ぶに用ゆる「ゴット」てふ名すら即ち、「ウオダン」のことに外ならざるものに似たり。ウオダンとは、暴風を擬人せるものにて、我等が異教的祖先の最も貴き神なりとす。(巻尾の乙)註を見よ。

基督教が斯く異教に屬せる名稱、記號、儀式等を保存したりしは、蓋し止むを得ざる勢たりしなり。基督教有神説なるものは、此の地上に出現せる最高の知者の業わざに成りしものなれど、賢愚、銳鈍、精粗各種の男女によりて採用せられ、而して此の多數の男女は、各々その祖先傳來の觀念と思想上の習慣とを持ち寄りたるものなればなり。此故に基督教有



神説は、甲者に甲事を意味し、乙者に乙事を意味せること往々あり。最高の基督教徒は、常に一神教者なりつれども、多数のものは容易に多神教臭味を脱却せず。否、最高基督教徒の一神説とても、原人時代より傳はり來れる觀念の影響を受けて、基督教一神説の純潔は之がために汚損せられ、非常に真理の探究者を苦めしと往々あり。此點の一例證として、左に基督教有神論者の懐抱せし神性觀の二反對説を擧げ、その近代の科學思想に對する關係を觀測せん。

五

神は世界に内住すこの觀念

野蠻なる原人の哲學は、人靈と物靈とを區別せざりしを以て、古代の宗教は、自然崇拜と祖先崇拜との紛亂錯綜なるは、前に已に之を論じたるが如し。されど、甲國民の間には、自然崇拜の分子著しく、乙國民の間には、祖先崇拜の分子著しかりしものゝ如し。精確の科學若しくは形而上學を以て萬事を遂行するに於て、古來他にその類例なかりし希臘人と印度人との間には、特に自然崇拜の分子著るしかりしは、思ふに偶然の符合にあらざるべし。かの印度人をして代數學を發明するに至らしめ、希臘人をして幾何學を發明するに至らしめ、双方をして遂に驚くべき科學的の宇宙説を打算せしめたる抽象的觀念力は、やがて亦彼

等が自然界の諸勢力を擬神する有様に現はれたり。見よ彼等は、幽靈説の助けを借りて、太陽の靈若しくは暴風雨の靈を想像するを得たりしなり。げに彼等一般の知能實に斯くの如きものあり。さすれば、彼等が一神説と接觸するに當り、その俊秀なる思想家は、粗笨なる神人同形説の助けを借らず、以て自然界の勢力の中に、又之を介して活動する神を思想し得たりしと、是れ怪しむに足らず。此點につきて、希臘教會の三大師父たるアレキサンドリヤのクレメント、オリジエン、及びアタナシアスの抱きたる神の觀念の特徴を觀測すると興味あり。此等三人の深遠有力なる思想家の哲學は、ストア哲學に得るところ少からず。彼等は神を認めて宇宙に内住するものとなし、自然法を介して、永遠に活動するものとなせり。彼等を以てすれば、神は局部的の人格者にあらず。即ち世界より隔離して、時々の前表若しくは奇蹟のみによりて

世界に働くものにもあらず。尙ほ亦此の世界は單に預定の方式に従ひて盲動し、時々干渉によりてのみ神の存在を感ずる死せる機械にもあらず。否、神は却て世界の中に常に存在し給ふ神たり。萬物の時々刻々存在する所以は、此の神に由るとにて、事々件々の相次で出づるも、亦神の知慧と善との永續的啓示なり。此の根本的見地に隨ひて、クレメントの如きは、ノスチック教徒の物質卑賤説を論駁し、出家禁欲説を非認し、世界は内住の神のましますにより聖まれりとなせり。又クレメントは「人の發明するものと神の啓示するものとの」區別を知らず、基督教は、古代人類宗教思想の自然的發達なりと説明せり。彼の神的全説よりすれば、既往には、將來の萌芽を悉く含蓄し居るべき筈なりしなり。此故に、クレメントは、奇蹟の譚に餘り重きを置かず。救を以て「内住的の神の導びきの下に」人の高尚なる精神性が自然の成熟を

逐ぐるの謂なりとなせり。次にクレメントの弟子たるオリジェンの説は、大にその師の説と相類する所あり。アタナシアスに至りては、數歩を進めて、秘奥なる形而上學の範圍に踏み込めり。而も、彼は其の三位一体説を用ゐて、アリウスの説の多神的傾向を打破し、また基督教と異教との調和の災厄を除きしと共に、クレメントの定めたる方針に向ひて進行せり。教授アンキサンドル、アレンは其の名著「基督教思想の繼續」の中に、アタナシアスの見地を明かにして曰く、「一神性中の三位たる父と子と聖靈との公式中には、古代の世界に紛々擾々たりし諸哲學派の認識と調和ありて存す。即ち東洋の人々は、永遠の聖父てふ觀念の中に、存在者の奥義と呼びて現象の背面に存し、神を求むる人に畏敬の念を抱かしむる神秘を認めたり。又永遠の聖子てふ教義の中に、プラトンやアリストテレスやストア派等の苦心して探究したる眞理、即

ち神と創造との密接なる關係を認めたり。蓋し聖子は、万物の生命、万物の光明として、自然と人類とに内住する聖父を啓示するものなればなり。又聖靈てふ教義を以てしては、教會は、神と世界とを凡神論的に混同することを避けたり。即ち此世に顯はれたまへる神の生涯を純然倫理的、精神的の生涯と看做し、人類が自らその使命を解する限り、又聖靈の力によりて、聖父と聖子との交通に入れる限り、之を最高人類の表顯と認められたればなり」と。

さてアタナシアスの此説が第四世紀に及ぼせる功勳は大なるに相違なきも、之を基督教有神説の永久的、若しくは本質的特色と見るべきにあらず。即ち此説の中に存する形而上學は、全く近時の形而上學に取りての異物なり。而も斯る大差違の存するにも拘らず、アタナシアスが、根本義に通じて神を宇宙の内住的生命と認めたる結果、殆んど近代

科學的思想の壘を靡せんとせしは、大に感すべし。而して更に是れよりも驚くべきは、其の大いに近代の進化説が我等の神てふ觀念に與へし特色と酷似せると是れなりとす。

## 六

## 神は世界より離れたるものなりとの觀念

されど前條述べ來れる希臘人の神の内住説は、羅匈語諸國には歡迎せられず。却て非常に相違せる觀念流行せり。此の理由は、思ふに、太古の祖先崇拜に伴ふ心的習慣に存するものゝごとし。即ち幽靈界てふ觀念に基きて、一箇の幽靈神を諸他のものゝ元祖と看做すに至れば、こゝに幼稚なる一神説の成立を見るべきを以てなり。野蠻民族の中には、斯くの如きもの往々あり。例へばズル族の如き、神の第一の祖先に大父ウンクルンクルなるものあり、是れ即ち世界の創造者なりとするが如き是れなり。但し此の思想の順序より到達せし有神説は、自然崇拜を介して到達せし有神説に比し、根本的の相違あり。その理由如何

といふに、自然崇拜の場合にありては、天の神、海の神は、現象の中に、若しくは現象を介して働く不思議の靈と認めらるゝも、祖先崇拜の場合にありては然らず。現象は現象以外に存する或る力によりて餘儀なく活動せしめらるゝものにて、此の力は、元來死者の幽靈と認められ、次で人類の如きものと認めらるゝに至りしものなればなり。此の推定より到達せし一神説よりすれば、宇宙は自動し得ざる死物にて、其の動くは、外部より動かさるゝ、盲目的勢力の致すところなり。又神は、此の世より離れて存在し、威儀堂々、咫尺し得べからざるものと看做さる。即ちカーライルの所謂「不在的の神、第一の安息日以来、なすともなく宇宙以外に安座し、その動くを傍観す」といふものは是れなり。此の観念は、神を宇宙の内住者と見る観念よりも、知力を要すると、尠し。即ち理解力を要すると尠く、経験を要すると尠し。随つて彼よりも一層普通的

の観念なりとす。内住の神てふ観念は然らず。是れ現實に神馳せんとするの舉にして、有限の心に力を課すると多し。神を宇宙以外に在るものとするの観念は、現實に到達せんとするの舉にあらざるが故に、心力を勞すると多からず。その中に有限的性質を存し、普通人は之に満足して若しその平和を攪亂せんとするものあれば、却て之を厭忌す。斯くいへばとて、余は、古今の大學者中に、此の劣等の有神論を懐抱せしものあるを非認するにはあらず。神の観念の如き、常住不斷的觀念にして一たび人類思想の全体と相纏綿するに至れば、如何ほど有力に、如何ほど聰慧の人といへども、その形状を変更すると甚だ難し。即ち心の纖維に織り込まれて無意識的に其處に常住すると、猶ほ數や量の公理に於けるが如きものあるべく、而して知らず、識らざる間に、我等の思想を左右するとあらんとす。さて此の二種の有神説は、古代、甲國に於

ては、自然崇拜を盛ならしめ、乙國に於ては祖先崇拜を盛ならしめし無数の勢力の下にありて、徐々の間に發達し、二千數百年間の凡ての哲學に影響せり。されば甲の教育を受けし人にして、乙の觀念を採用し、遂に之を常用するに至りし人は、極めて稀に、其の是れあるは、只近代科學の大影響を受けし人ある而已。而して近代科學の傾向は、只一方に向へると、後ちに之を説くが如し。

古代の思想家の中にありては、神を世界より離れたるものとするの觀念、エピクロス派の學者中に行はれ、不死の神は瑣々たる人事に己れを累はすが如きものにあらず、高く穹窿の上において、その安樂なる生活を送るものとなせり。此の説は、世界を盲目的勢力の權下に置くものなるが故に、羅甸文界屈指の一人、ルクレチウスの詩中には、現に此の思想の存するを見る。思ふに同人はアウガスチンを除けば他の羅馬文

士に比して、大に宗教的なりしに相違なきも、その説くところは、如何にも無神的世界なり。されど彼の科學的目的に取りては、此の無神説は、決して障礙にはあらざるなり。見よ、我等、科學的説明を下すの意向にて、自然的現象を研究するに方りては、先づ是等諸現象の起りし物質的事情を調査すべく、形而上學若しくは神學の範圍に立ち入ると尠ければ尠きほど可なるにあらずや。數學者が方程式を解する時、『神なる假定』を要せずとはラプラスの言へるが如し。單の科學的研究に取りては、自然の諸勢力は、思ふに代數學のX及びYと同様、盲目のものなるに相違なし。されどその盲目のものたるは、只その運動の方法を記するを以て足れりとする間に限る。若し之を我等の見るが如くに、哲學的に解釋せんとする時は、その有神假定を排除すること能はず。此故にルクレチウスの哲學は、當時に知られたる物質的宇宙の諸事實を科

學的に調和するの擧として、感すべきものなしとせざれども、哲學として見るに足らず。而して此の無神説が、神を宇宙以外に置く一種の有神説に次で起りたるは一奇といふべし。近代の無神説の場合も、亦之に類せるものあり。即ち近代の無神論者若しくは、實驗論者等は、此の幼稚にして且つ誤解せられ易き神の觀念が科學的知識の進歩により非難を受くるに至りしを見て、時を得顔に盲目的勢力の宇宙に立ち還り、あらん限りの聲を發して、此外別に神なるものあらずと絶叫しつゝあり。

人類は、神の注意を受くべきものとしては、余り微少のものなりとは、基督教思想に慣れし人の不快且つ奇異に感ずる所なるべし。基督教諸國が非常の影響感化を蒙れるプラトンの説には、甚だしき欠點ありて存す。即ちプラトンは世の罪惡と墮落とを見て、其の強き同情と鋭き

道念を動かされ、人生を惡と見ると、殆ど佛教徒同様の結論にとは到達せり。其の「チマイオス」の中に、物質界の事を記して純然惡しきものとなし、純潔至誠の神、此の中に顯はるといふが如きは、その思想し得ざりし所なるが如く、随つて、造者と被造者との間には、無限大の鴻溝ありとなせり。此説やがて、ノスチック派に傳はりしが、此派に取りて哲學上の難問は、精神的の神が如何様に物質的の宇宙に働くかを説明するとなりき。時としては、此の鴻溝に架するに、「エオン」即ち一部精神的一部物質的なる分出物を以てし、以て居中調停せしめたるとあり。時としては、世界は惡魔の工にて、断じて神の工にあらずと主張せられたるともあり。希臘の師父等は、クレメント指導の下に、やゝ高等の有神論を主張し、ノスチック派の此の思潮を脱却したりと雖も、アウガスチンは再び此の思潮に捲き込まれ、遂に之がために流し去られたり。その

壯時の著述には、アウガスチンもクレメントやアタナシアスの所見を解せざるにあらざるの形迹あり。されど人は悪なりとの感は、如何にも強かりしを以て、彼は之がため反對の方向にとは拉し去られたり。彼の原罪説を見るに、人類は全く神とその關係を切斷せられたるものにて、又神は遠く宇宙と懸隔せる神人同形的のものなるが如く、我等若し之に咫尺せんとすれば、組織せられたる教會の媒介に由らざるべからず。此の思想たる、之を希臘の師父等の思想に比すれば、野蠻的觀念と謂はざるべからず。されどこは劣等なる西歐の文明には能く適當し居たりしなり。亦當時、帝國の衰時に際し、帝國的教會の設立に忙はしかりし羅甸の政治家等にも、能く適當し居たりしなり。是等の理由にて、アウガスチンの神學、遂に勝を制し、その後、暗黒時代に至るに及び、此の思想は、深く羅甸基督教の纖維中に織り込まれ、今日にても、舊教會

及び新教會に等しく其の勢力あり。西歐若しくは米國の基督教徒たる父母間に生れし子女は、大抵、皆、千五百年前、アウガスチンが人心に刻み込みし神の觀念を根據として教育せられたるにあらざるなし。否、實に然るのみならず、今日基督教と稱せらるゝ教義の四分の三は、聖書の證明にもあらず、キリスト若しくは其の使徒等の夢想せし所にもあらず。その使徒時代を去ると、今日より印刷術の發明、米國の發見を去ると粗ぼ同じき時代に生れしアウガスチンの著述によりて確定せしものなり。凡て此のアウガスチンの説の根據となりつる神は、人的の慾情あり、人的の目的あり。空間に限局せられて、宇宙即ち自動し得ざる器械と相隔絶し、時々自然性と稱するものを以て、之に干涉を試むる神なり。而して此の思想の基督教國民に浸染するの深き、若し之を前條の如くに露呈して赤裸々となせば、熱心之を反駁せんとする人



々の凡ての思辯、凡ての議論の根據に、伏するを見ても明かなり。即ち此の思想は、信者と懷疑者、有神者と無神者の推論を等しく支配し、正統派の人々が科學の新進歩に反對し、唯物論者が宗教者の世界觀を駁撃するにも必ず之をその根據とす。さすれば、悲しむべき思想の混亂より生ずる「宗教と科學の衝突」なる紛糾せる誤解も、その原因、主としてこゝにありと謂はざるべからず。

七

普通に宗教と科學の衝突として誤解せらるる兩觀念の衝突

アウガスチンの神の觀念より生ずる弊害の一例は、我等、ニウトンの重力説と、ダーウインの自然淘汰説に對する神學者の反對論を見て之を知るを得べし。ライプニッツはニウトンに劣らざる數學家にして、容易に重力説の眞理を確信すべき筈の人なりしに、神學上の狐疑より之を承認するに至らざりき。是れ神の「直接的行動に代ふるに、物質的勢力の行動を以てするものと見わたればなり。さて此のライプニッツの論法の誤謬は、之を指摘すると易し。是れ「勢力」てふ語の意義の哲學的誤解より生ずるものなり。「勢力」とは、ライプニッツを以て見れば、一

種の實在物にて、又神の行動法と殊別の行動法を有する惡魔なるもの、如し。然らざれば、神を以て勢力に代ふといふは、無意味のものと謂はざるべからず。されど「勢力」を斯く擬人するは、是れ野蠻思想の遺物にて、物理學の斷じて認承せざる所なり。今天文學にして、二箇の遊星、その大きさに正比例し、距離の自乘に反比例せる「勢力」をもて相引くといへば、便宜上此の兩星の相引く有様を直喩を用ゐて言願せるのみ。即ち兩星の相面するや或る一定の方法にて各自その地位を變ずといふに止まり、その他には、何の意義もあるにあらず。嚴正なる科學的假定の斷定し得るところ、また凡ての觀測の證明し得るところも此外に出でず。然るを是れより以上、兩星間に別に何等かの「引力」あるを想像若しくは、斷定するが如きとあらば、それは科學にあらずして、形而上學なり。無神的の形而上學は、或は斯くの如き「引力」ありと想像し得る

ならん。而して之を神ならぬ或るもの、行動と解釋し得るならん。されど斯る結論は科學的定論には一も其の根據なし。科學的定論は、現象の概括的記述に過ぎざればなり。よし亦斯る科學的定論が成立したればとて神の存在及び其の直接的行動を信する信仰の根據は、動搖するものにあらず。我等は尙ほこは、神の直接的行動が星辰の運動に表顯せらるゝと主張するの自由を有す。而してニウトンの假定は、此の表顯の方式若しくは、秩序を言願はす公式に過ぎず。我等或は神の行動に關して、新發見をなすともありぬべし。されど神の行動に代ふるに、他者の行動を以てするが如きとは、斷じて是れあらず。さて斯く天文學上に於て明言し得るとは、現象と現象との關係を論ずる何等の學理にも之を應用するを得べし。科學は、觀察したる現象若しくは、觀測し得る現象を直喩的に記述するの外、「勢力」若しくは「原因」等の

語を用ゐ得るものにあらず。此故に、將來たりとも、人類思想の根本的状態に變更なき限り、科學は、神の直接的行動に代ふるに、他の力の行動を以てするを得ず。さてライブニッツがニウトンに對して唱へたる神學的反對論は、アガツシ之をダーウインに對して繰り返へせり。アガツシ以爲へらく、神の創造的行動に代ふるに、物質的勢力の行動を以てするが如き觀あるは、是れダーウインの最大欠點なりと。されど此の批評の誤謬は、恰かもライブニッツの議論の誤謬と相同じ。ダーウイン氏の說によれば、極めて複雑なる有機体の存在は、即ち是れ瓊末偶然の觀ある種々の境遇を集合したるの結果なり。されど此の一端の境遇、一々の出來事は、神の創造的行動の表顯と解するは、有神論者の常に占居すべき立場ならん。

此點に關して茲に一言し置くべきとは、科學的説明の眞領分は、何ぞや

といふと是れなり。哲學的有神論は、神の力を凡ての現象の原因と認むべきものなるが故に、科學にして某々の現象を神の行動と解するの不當なるは明瞭ならずや。げに、某々の現象を神の行動なりといふが如きは、是れ説明にはあらず。その理由は、こは現象に關しても、又神の行動に關しても、我等の曾て承知せる所に寸毫の加ふるところなければなり。科學の本領は、只如何様にして現象と現象とが共存するか、如何様にして現象と現象と相繼續するかを確定するにあり。而して其の當然取り扱ひ得る説明といへば、現象の一群と他群との關係に就ての説明あるのみ。科學は此の本領を遂行するに於て、少しも神學の領分を侵すことなく、隨つて兩者の間には、何等の衝突もなかるべしと思はる。されば此點よりするも亦前に論せし所よりするも、ニウトン説及びダーウイン説に含める諸説明は、曾に有神説と全然兩立するのみな

らず、却て科學の當然關係し得る唯一の説明なり。複雑の有機体が直接神に由りて創造せられたりといふが如きは、有神論の意義に於ては不當ならずと雖も、是れ全く無意味の斷定と謂はざるべからず。こは斯る斷定を下さざる以前已に認知せられ居るべきものなれば、有神論に取りては寸毫の益なし。而して科學に取りても、此上尙ほ「如何にして」てふ質問を起すべきものなれば、是れ亦同じく寸毫の益を受けずと謂ふべし。

以上論ずる所を以て見れば、ニウトン説及びダーウイン説に對する神學的反對論は、アウガスマチンが西洋諸國をして固信せしめたる不完全の有神説に基づくと明了なり。若しライブニツツとアガツシとにして、昔はクレメントとアタナシアス、後世にはスピノザとゲーテとの懐抱せし高等有神説により教育せられたりとせんか。換言すれば、彼等若

し神は宇宙に内住し、永遠に創造すと思ひ慣らせりとせんか。さすれば、彼等の熱心に主張せし論法は、到底是れあるを得ざりしならん。即ち斯くの如き論法は、彼等の心に起り得ざりしならん。斯くの如き場合には、「物質的勢力」を認めて神の行動に「代ふべき」行動を有すとすすが如きは、到底不可能のとならん。蓋し斯る觀念は、神を世界より隔離し、外部より之を動かすものとするの意を含めばなり。神學者の好んで「第二原因」と稱するものには、神を斯くの如きものとするの意ありて存す。されど高等の有神説即ちアタナシアス有神説は、此世に所謂第二原因なるものあるを知らず。此世の萬事は、皆直接に永遠の第一原因即ち神より流れ出づるを知るのみ。又物質的勢力に就て、何事をも知らず。只それが遍在的なる神の創造力の表顯なるを知るのみ。かの物質的勢力を擬人し、暗にその行動と神の行動とを對比する

が如きは、昔時の多神教の特色たる思想の習慣の遺物といふべし。此等擬人せられたる諸勢力は、神聖なるゼウス神の領地を侵害するものと想像せられたる諸小神にあらずして何ぞ。人若し重力の行動を以て、神の行動に代へんとて辨する時は、その思想の背後に、臆ろげながらも、逆神チタンの粧ひせし重力の妖怪を認め居るにあらざるか。勿論然り我は之を認むと容易に答辨する人はあらず。されど誤謬の自認せられざる部分は、最も頑固に、最も有害の部分なるを知らざるべからず。之を要するに、我等の祖先が野蠻たり、多神教徒たりし以來、未だ多くの年所を経たりと言ふにあらず。而して此の野蠻的思想の遺物は、近代科學的教育の中堅にも、絶えず侵來しつゝあり。例せば、多數の哲學的議論に種々汎意なる語句の應用せらるゝが如きは是れなり。而して我等之が適當の含意を知らんとすれば、原人的の未開時代に溯らざるべ

からず。自然の勢力を擬人して、之を遍在的の神の表顯以外のものとするが如きは、即ち此の類なり。此の問題は、尙ほ甚だ大切と覺ふるが故に、更に他の點より之を説明せんに、科學的發見の進歩と共に、宇宙の大部分には、神なしてふ想定が、科學的議論に浸染するに至りしは、是れ觀察し置かざるべからざる一事なり。此點に關しても、我等は暫らく亦原人時代に立ち歸り、當時物質的現象の背後には、人類的の慾情、人類的の意思あるものなりと想像せられしとを觀察せざるべからず。さて最初に人心中に排列組織せられ、而して一種の科學的概括の如きものゝ問題となりし現象といへば、最も單純に、最も近づき易く、又最も取り扱ひ易き現象ならざるべからず。而して斯くの如き現象よりしては、擬人的の觀念逸早く消散せり。例せば野蠻人の中には、斧若しくは茶瓶に靈魂ありと信するものあり。

されど斯る信仰は、暴風の神、太陽の神、太陰の神等の信仰を棄つるよりも遙か以前に棄てらるべきものなり。その後ち、教育を重ねるに従ひ、日常的の現象を執意の結果と認むるの風廢り、只非常の現象即ち彗星の如き、日月蝕の如き、飢饉の如き、疫病の如き恐るべきものに、原人的の解釋を加ふることなれり。此の思想の習慣の結果として、自然界は恰も二個の反對せる領分に分たれたるが如き觀を呈するに至りぬ。即ち一方に於ては、多變的執意の結果とは見るを得ざる規律正しき現象あり。是等は皆自然性の王國の要素と想像せられたり。然るに又他の一方には法則の存在を窺知すべからざるまでに、複雑、不規律の現象あり。是等は、神の直接行動の王國の要素と想像せられぬ。さて此の反對せる二現象は、劣等なるアウガスチンの有神論に染みし人の心に絶えず往來し、而して基督教諸國の大部分も亦然り。その結果、神學者をして、

科學に反對せしめ、科學をして、神學に反對せしむるに至る。是れ蓋し科學的の概括は次第に、自然性の領分を擴め、神學が神の行動と認め來りたる領分は、益々縮少したればなり。科學にして新發見をなせば、その度毎に、後者の領分を蚕食して之を前者に加ふるが故に、神學者は、之に對して、酷薄亂暴の反對を加ふと雖も、此の反對は、偶々以て、科學の新發見を宣傳し、且つ之を確立するの因となれり。而して此の激戦は、過去幾百年に涉り、科學は、次第にその争點を占領し行くに拘らず、失敗に懲りざる神學は、頑然その殘れる一小隅を固守しつゝあり。即ち普通の神學者等は猶ほ古代の神學者の如くに、自然の常經に對し、不秩序、多變的、奇蹟的の干涉ありとの假定をもて満足し、又幼稚千萬なる問を發して曰く、『若し植物及び動物にして自然に發生したるものならんか。亦世界は全体として、進化せるものにて、製造せられしものならざらん

か。又人類の行動は法則に合するものならんか。神のなすべき部分  
 將た那邊にかある。是れ形式上には神を否定するものにあらずとす  
 るも、只便宜のため、假設せられたる過去の万物の原因にて、實際上の目  
 的には、度外視し得べきものとするにあらずや」と。  
 科學者は之に答へて、此の難問は神學自ら發明せるものなりと謂はん  
 とす。神の創造的行動を過去のとなし、現在の世界には、全く無關係  
 のものとするは、斷じて科學の所爲にあらず。神の行動と自然法との  
 間に有害の區別を設けたるは、決して科學の關知せざる所なり。此の  
 區別たる之を歴史上よりいへば、未開時代の放漫なる究理法に淵源し、  
 而して羅旬教會の神學より今日に遺傳したるものなり。果して然らば、  
 斯くの如き説を根據となし、我能く神を認めずして宇宙を解釋し得べ  
 しと自信する無神論者は、必ずしも尤むべきにあらず。是れその有す

る材料の如何を知り、而して其の爲すべきとを爲せるものなればなり。  
 此時に方りて、人の當さに爲すべきとは、クレメントとアタナシアスの  
 高等有神説を採用するとなり。さすれば多くの人を悲ませ、多くの心  
 を味ませたる科學と神學との衝突は、長く雲散霧消せん。「一羽の雀も、其  
 の許なくば、地上に落ちざる神てふ觀念にして、一たび採用せられんか。  
 即ち重力の法則は、特別なる神の行動法の表顯たるを、自ら判明せん。  
 而して重力の法則にして然りとせば、他の法則に於ても亦然るべし」  
 神の行動とは秩序ある行動の謂にして、眞に不規則なる現象は、惡魔の  
 行動の表顯なるが如き感を抱ける人は、新知識の開け行く毎に、益々そ  
 の信仰を堅うするものなり。此人の見地よりすれば、研究者としての  
 我等の義務と、禮拜者としての我等の義務との間には、何の衝突もなく、  
 また宇宙の何れの部分にも、神なき所とては、あるとなし。彼は分子の

動搖にも、依帖兒の波動にも、惑星軌道の變化にも、霜と雨との作用にも、種子の不思議なる發芽にも、死生の盡きざる話にも、嬰兒の智慧付きにも、人の諸の行爲にも、その靈魂をして畏敬の念を起さしむるを發見せざるなし。而して科學的の説明は、永遠至高者の榮光を漏らす窓戸ならざるはあらず。

八

神人同形説

以上相對比し來りたる神の二觀念の間には、尙ほ一點の相類似せるところあり。而して此點は、由て以て両者が等しく有神説と稱せらるゝの點なるが故に、根本的のものなり。即ち両者とも、神と人との間に、何等かの類似あるを想定す。されど此の共通點に關しても、兩者の間に非常の相違あり。即ち一方にありては、神人同形的分子は、粗漏なるに、他の一方は、精細微妙なり。而して其の相違の少々ならざる、先年余は、此の兩觀念を比較して、一方を神人同形的有神論といひ、他の一方を宇宙的有神論と稱せんとせしとある程なり。夫れ、神は宇宙に内住すと唱へ、事件の秩序的繼續をもて己れを啓示すとすとの説を宇宙的



有神説と稱するは、蓋し適稱なり。さればとて、此の反對的名稱を設くるの意、毫も、宇宙的有神説なるものに、神人同形的分子なしとするに存せず。人類の靈魂を以て、宇宙に孤立せるものごなし、存在の永遠的淵源と無關係なりとする説の如きは、之を有神説と稱し得べきにあらず。否、是れ無神論なり。是れその哲學的側面に於て、『人類の意識以外、宇宙に心的のものなし』とするものなればなり。クレメント、オリジェンを初めとして、スピノザ、レツシング、シユライエルマツヘル等の宇宙的有神説と、小説との相距ると遠しと謂はざるべからず。されど此の宇宙的有神説と、トルチュリアン、アウガスチン、カルヅイン、ゾオルティア、パレー等の懷抱したる神人同形的有神説との相違は、随分甚だしきものなれば、之を反對せるものといふも、敢て不可ならず。而してその反對の説明は、此の兩觀念の歴史的起源に溯りて之を求めざるべからず。

宇宙的神學なるものは、前にも已に述べたる如く、物質的現象に内住する種々の精靈ありとする自然崇拜を経て、こゝに到達せるものなり。之に反して、神人同形的有神論は、太古の祖先崇拜の一部分たりし鎮守神の觀念の産出せるものなり。宇宙的有神説に到達せし手續に於ては、物質的概括、主として、その用をなしたるも、神人同形的有神説には、前にも言ひし如く、人類の政治的觀念より出で來りし分子ありて存す。かのアウガスタス大帝を神とし、崇めし羅馬人の如きものに取りては、神を以て天の御位に座し、幾多の天使に圍繞せらるゝ王とし崇むるは、是れ自然の勢にして、亦容易のとなり。而してこゝは基督教の初代に専ら世に行はれたる觀念にして、無教育の人民の間には、今日も尙ほ全く消滅せず。哲學者の心を以て之を見れば、此の觀念は、極めて奇怪のものながら、亦以て如何ばかり無教育の人を満足せしめ易きものなるか

を知るべし。思ふに、此の観念には、別に一定の形式を付せずして之を抱持し居る人多かるべく、亦之を或る程度まで、表號的のものと認め居る人も多かるべし。されど、無数の人々は、神人同形説の純然の意義に受け取り居るは、萬疑ひなきところなり。或は説教に於ても、或は神學的論文に於ても、或は堂々たる詩歌に於ても、或は日常の談柄に於ても、神は或は喜び、或は怒るものとせられ、或は己れの行を悔ゆるものとせられ、或は阿諛によりて慰めらるゝものとせられ、或は冒瀆の説をなす恐者に、復讐を洩らすものとせらる。かの中古の宗教演劇費用の奇なる請求書には、『地獄の口の火』を熄えざらしむる費用として二片を請求すると共に、神の紫衣の費用として、一志を請求するの條項あり。又此の演劇の一つに、キリストの磔殺を目撃せし一天使、倉皇として天に上り來り、『目覺めよ、全能の父。乞食の如きユダヤ人等、今汝の子を殺しつゝ、

あり。而して汝は醉人の如く昏睡す』と叫びたるに、『我若しそを知りたらば、悪魔となりしならん』と半覺半睡の様にて答へし一條あり。此の宗教演劇は斷じて不敬虔の意義なりしにあらず。否却て、普通人民に健全の教育的感化を興ふるため、中古の教會が許可し居たる仕種に過ぎず。されど斯くの如き事實と併せ考ふる時は、近代の初めの畫家が神を長髮美髯の威儀堂々たる老人として代表したること、學者には兎も角、普通の人には、單に表號にてはあらざりしならん。人の思想は一旦斯く慣れ來りたる以上は、甚しき神人同形的ならざる神の觀念を構成するは、不可能のことゝならん。余五歳の時、自ら構成せし觀念を、今尙ほ明了に記臆す。即ち余は、天心に、狭き事務所ありて、そこには、高さ机、縦に並列せられ、革製の帳面、貳冊が開きありしと想像せり。又此の事務所には、屋根なし。而して四壁の高さは、床より五呎に満たざる

が故に、机に向つて立てる人は、能く全世界を下瞰するを得たり。机邊に二箇の人あり。その一は、瘦せて高きこと、鷲の如く、眼鏡をかけ、一手にペンを取り、又その耳にも他のペンを載せたり。是れ即ち神なり。次に他の一人の容貌は、余今明かに之を記憶せざれども、之に侍する天使なり。双方とも、熱心に人の行爲を監視し、帳面に之を記録しつゝあり。さて此の想像畫たる余の幼な心には、決して奇怪ならず。却て言語に絶するばかり儼かにて、末日審判の時、余を調査するため、余の一切の言行を記録すとの事實は、自ら非常に大事とは見えたり。我等若し我等の知れる凡ての男女と、その他また凡ての小兒とを精細調査せば、思ふに此の文明の世にも、開化せる諸國に行はるゝ神の觀念なるもの、案外に、極めて幼稚なる神人同形的分子を含むを發見することならん。そは兎も角、斯くの如きは、我等が尙ほ幼稚なる時の觀念の

特性と見えたり。此故に經驗に富みし人が、此の問題を研究する場合には、その觀念は、大いに穩健となり來るべし。即ちその觀念は、神人同形的の定形を失ひ、却てその膨脹のために、大に朦朧と化し、而して大部分は表號的のものと認めらるゝに至るべけれども、尙ほ其の太古の形を全脱することなし。然り、之を全脱するを得ざると、余の前に言へるが如し。若し神人同形主義を全廢するが如きことあらば、即ち有神論を全廢するに當ればなり。乞ふ我等近代の宇宙說に照らし、太古の形の如何なる點が、此の神の觀念に保存し得べきかを論究せん。

## 九

## 意匠論

最も上品にして又最も科學的の形式を具へし神人同形説といへば、バレー及びブリッヂウオトル論文集の著者とその名相關連せる意匠論是れなり。此の論法たる基督教に特有のものにはあらず。蓋し異教徒の中にも、將た又不信者の中にも、教會の最も篤信なる信者同様に、堅く之を抱持し居る人も亦是れあればあり。さて此の意匠論は、ソクラテーズの時以來、已に是れあるものにて、ヴォルテイヤや、第十八世紀の英國自然神學者等が之に依頼したりし而已ならず。博士チャルメルス及びサーチャールズ、ベルの如きも亦之を主張したりしなり。此の論法の想像によるに、宇宙は人類の知力と執意とに根本的類似したる

知力及び執意を有する大存在者により創造せられたるものなり。此の大存在者は、其の受造者の利益を謀るの念に動かされ、而して之を遂行するため、種々の目的を懐抱し、亦巧みに、その手段を目的に適合せしむ。先づ世界の創造せられたる過程は、製造者と同様のものなり。即ち有知なる工業者が、客觀的に存在する無知の材料に工作を施すものなればなり。かの自然神學の諸著述や、又不都合にも神學上の議論を交ふるを善しとする科學上の教科書などに、「神なる建築者」といひ、「大なる意匠者」といふが如き語を用ゆるものあるは、蓋し此意匠論に従へるなり。

意匠論は今日も尙ほ世に行はれ居るものなるが、現世紀の初め頃には、殊に非常の人氣を博し居たりしなり。當時、物理上の知識駁々として進歩するや、科學を聖別して之を神學の用に充つるを以て適當のこと

せられ、之と同時に、意匠の點よりする論法を重んじ、斯くて神學は、科學の方式を採用せり。而して彼等が或は耳目の構造に於て、或は動物の地球上に於ける分布に於て、遊星の軌道の形とその軸の傾斜に於て、或は諸他の自然物の排列に於て、恩惠的目的の證據を發見するの舉は、眞の歸納的の企てなりき。當時、この議論を助くるがために、その精力を集注したりし諸大家の勞は、實に多とすべきものあり。而して其の證據の大部分は、ラマルク及びキユヱーの時に、その該博なる研究の緒を解さし有機界よりして得來れるものなり。抑も有機界は、有機物とその境遇との間、又有機物各部の間にある美にして驚くべき適合を以て満ち、而して此の適合の目的は、一として動物若しくは、植物の幸福にあらざるはなく、其の生活の伸長と完全とを助け、又その子孫の永續と繁盛とを扶翼す。此故に、此の自然神學の論法は、一時神學界の大

勝利者たるが如き觀ありき。而して之れと同様の論法は、植物及び動物の分類及び形体を説明するためにも、益々應用せられ、一千八百五十九年に出版せられたるアガツシの「エッサイ、オン、クラシフィックーション分類論」に至りて其の頂點にとは達したり。此の分類論を見るに、凡て有機物は皆人心の解釋すべき造化の具体的思想と認めらるゝ而已ならず。又此の種の説明法は、有機物の起源たる物質的原因の研究に代ふべきものとせらるゝなり。されど意匠論は、その盛時にありて、重大の弱點を帯び居たりしなり。こはミル氏の能く指摘せられたるところなり。即ち此の論法の欠點は、證明度に過ぎて論理上弱點を來せしにあり。而して世界は、有知の意匠者の工作なるを示し居たる成功こそは、却て此の創造者を全能的なると共に又多恩的なりと想像するを得ざらしむる理由なれ。試みに

思へ、自然界は、残酷と不適合とに満てりといふよりも明かなるものあらず。動物界の各部には、宗教裁判の牢獄に用ゐられしものに優りて残酷無情なる苛責機械多し。又我等は總戦闘の間断なく行はれ、其の結果は、有情物に取りて有利、幸福ならざるを見るに妙からず。ダーウイン以前にありては、我等未だ表面の下を探り得ざりしかば、斯くの如き結果あらんとは思はれざりしも、今や然らず。例之ば高等の生物は、無残にも、劣等生物の犠牲となると、かの寄生虫が己れよりも高等の動物を食ふ外には、一切他の目的なくして創造せられたる観あるが如き是れなり。斯くの如きことを考ふれば、罪惡の起源てふ舊問題は、一層の力もて復活し來るを覺ふ。若し夫れ斯くの如き世界の創造者にして、全能的なりとせば、單にその受造者の幸福てふ念に動かされしものと謂ふべからず。否こは却て從目的にて、本目的は、此の他にありとせ

ざるべからず。又此の創造者を以て絶對に恩惠のものなりとせば、即ち全能的なるべきにあらず。却て事の性質上その創造者を制限する物ありとせざるべからず。而して此の二重体たる、人の思想の始まり以來、是れあるものにて、今日も尙ほ屢々提出せらるゝ種々の宇宙論の遭遇する難關なり。特にこは、神人同形的の諸有神説に取り、恐るべきの故障なり。蓋し之を避け得るの途とては、之を一種の秘奥なる神秘と假定し、人知にして充分之に分け入るの日あらば、その時初めてその解釋を發見せんとするの外なければなり。然るに如何せん、我等神の働き方と人の働き方を比較すればするほど、愈々益々この通路を閉塞するものあるとを。

實際上、往々採用せられつゝある解釋は、神の全能性をその恩惠性の犠牲とするは是れなり。純粹のアリヤン諸宗教の最も高尚なる者「」

ンド、アヴェスタ』の中にその聖經を有するにありては、アールマンてふ悪鬼は、オーマズドといふ善神の意思以外にありて獨存し、世の罪は皆之に起原するものとなす。されど時の至るに及びては、此の悪鬼遂に鎖に繋がれ、その害をなすべき力を奪はるゝといふ。此の説は麻尼西教の形にて、基督教國に傳はりしが、その要點は、正統基督教にも採用せられ、之と同時に、該基督教はまた、二重体の他の一角をも捕へ、以て、神の全能性をも救はんとせり。是れミル氏の所謂、神を悪魔の造主とする如何はしき贈物なりとす。此の方法は聊か此の觀念の多神的なるを味ますの功なしとせず。随つて普通の人は、思想の混亂にその眼を掩はれ來れり。されどアリヤン人種中の最も深奥なる思想家の中には、造物者の力を制限する解釋を公々然採用せし人二人あり。その一人は即ちプラトンにて、神の完全なる善徳は、その使用せる材料の起

源の尋ね難きにより幾分か制限を受くといへり。此の説は、ノスタック派の人々により、その極端にまで推擴せられ、神の工作は、元と悪魔の創造せし世界を贖ふに於て存すとせししが、正統的基督教にありては、是よりしてアウガスタンの全墮落説と亦之に根據せる『救拯哲學』とは出で來りぬ。次に同様の解釋を採用せし第二の思想家は、ライプニッツ是れなり。同人はその有名なる樂天説に於て、世界を完全なるものとはなさず、只出來得べき凡ての世界中の最上のも、造化がその所有したりし材料にて造り得たる最上のもとなす而已。近時にありては、ミル氏非常に此説を喜ぶものゝ如く、亦當今生存中の宗教上の先輩の一人、博士マルチナウも同様の意見あるに似たり。蓋し氏は、物質の原性を論じて、『是れ神以外に獨立したるもの。神は無限より軌道を作り、永遠より時節を分つに於て、彎曲法、數量法、比例法に従はざる

を得ざりしなり』といへばなり。

さはいへ、意匠論は、全能的、恩惠的の意匠者の存在を證する能はざるを示すため、罪惡の問題にまで論及するの必要は、げに是れあらず。手段を設計、畫策し、且つ之を目的に適合せしむるは、全能なる所以にあらず。是れ寧ろ知力に限りある者の方式にて、此の方式は、故障に勝つといふとを含む。然るを若し之をその全能に歸するが如きとあらば、種々の意味ある言を組合せて全く無意味の句とするに異ならず。『神光あれ』と言たまひければ、光ありき』とは、如何にも高尚なる創造的、全能の叙事にあらずや。此中には寸毫たりとも、畫策てふ意義存せず。然るに意匠論が、當然成功し得る望あるとといへば、たゞ人類に優りし知と恵とを具へしもの、宇宙を今日の有様に作りたるが如しといふに出でず。而して此の造主は力に於ても、材料に於ても無限なるものと言ひ得べ

きにあらず。而して斯くの如き論法は到底眞の有神説の位地に達し得べきにあらざるなり。



## 十

## 花の譬をもて時計の譬に代ふ

一時全盛を極めたる意匠論が、遂に陥落の非運に會せんとせしは、其の最も得意の城寨内に於てなりき。即ち意匠論は、其の論據を、有機界の適合に於て、亦生物とその境遇との調和に於て發見せんとするもの、如くなりしに、今や、ダーウインの自然淘汰説出で來り、轉瞬の間に、此の凡ての論據を打破し終れり。蓋し有機体とその境遇とは、創造力のために、相互に適合せるにあらず。却て有機体は、始めより行はるゝ生存競争に於て、只適者のみが生存するより、餘儀なく境遇に適合すると分明したればなり。他語以て之をいへば、『地球はその住民に適す。是れ地球はその住民を生じたるものにて、斯くの如きものゝみ之に住す

るに適すればなり』生存競争の活劇にありては、人々箇々の特色はたとひ如何ほど瑣少のものなりとも、その効なきはあらず。即ち自然淘汰は間違なく此の特色を捕へて、傳播し、而して此の作用を累ぬるまゝ、今現に有機界に満てるが如き諸の美はしき適合生出せり。博物學者等がその一代の勞力を以て、此の點を證明せしとは、是れ近代科學の大功勳の一といふべく、而してバレー及びブリツヂウオター論文集の著者等には致命傷を與へたり。

されどダーウインの自然淘汰説は、決して獨立のものにはあらず。是れ進化論と稱する全体中の一部份にその要部を占むるもののみ。今やこの進化論は、近代の科學的大運動の到達せし結果によりて漸次建設せられ、ハーバート、スペンセルの如きは、ダーウイン説が世に未だ公けにせられざりし以前、已にその梗概を發表し居たりしところのもの

なり。此の進化論は、既往と將來とを通じて、我等の視界を擴げしこと尠からず。全く我等の宇宙觀を一變せしめたる程なり。我等の祖父時代には、尙ほそれよりも以前の人々と同様、世界は、或る一定の時に、今日と多く異ならざる形にて、創造せられしものと思惟したりしなり。されど今日の知識は、斯くの如くに思惟するを許さず。而して我等天地の創造を知らんとすれば、諸の大紀元を辿りて之に溯らざるべからず。此の中の或ものは、數百万年の長きに亘りたるもあるべく、而して各紀元には、それ／＼特色の生物ありて、此の地上に満ちたるにて、當紀元に最も近き紀元の生物にても、今日のものとは、著しく相違せしものたりしなり。否我等は、こゝに溯り得るに止まらず。地球が蒸發氣の渦捲たりし時代にも、亦その太陽の上にありて、直徑二億万哩の赤道帶たりし時代にも、亦太陽自らが一群の大星雲にて、未だ一個の遊星だも

成らざりし時代にも、溯り得べし。而して此の悠久の年月を通じ、單純なる太初の蒸發氣より以て、今日我等の知れる種々の世界に至るまでの間に種々の自然の形が、逐次或る法則に隨つて發生せしものなるを我等は知る。此の法則の性質と範圍とは、我等今や漸く之を明らかにめつゝあるとなるが、斯くの如き世界には、パネーの時計の譬喩の如きは、適用し得べきにあらず。即ち之に代ふるに花の譬喩を以てせざるべからず。宇宙は機械にあらず、その中に内住的の生命を有する有機体なり。作られたるものにはあらず、生長したるものなり。此の宇宙觀の變化が、人心上に最大革命を興へたることは、是れいふまでもなきとなり。されど、是れにても尙ほ變化の深さを充分に言顯し得たりとは謂ふべからず。近代の科學は、自然の種々なる形式が進化作用によりて起りしことを證明する而已ならず、又自然法なるものも、同様

の作用により進化したることを明かにす。凡て近代の科學が其の基礎とせる勢力永存の公理の如き、其の必然の系論として、勢力と勢力との關係の永存をも包容す。此故に、勢力の永存と物質の原性とより説き起せば、我等の呼んで自然法と稱する俱存上將た相續上、彼此必ず相同じきものが、其の發顯の折の形と相關係して起れるものなるを知り得べし。新くの如くにして、自然界を通じて存在する調和なるものが、是亦自ら自然的の産物にて、宇宙は造物主が己れ以外の材料を用ゐ、超自然的に之を製造せるものと想像する神學者の根據は、全滅せりと謂つべし。

十一

終局原因を求む

果して然らば、神を世界より隔絶せるものとする觀念は、近代知識長足の進歩の結果たる思想上の革命を切り抜けて、生存し得べしとも思はれず。神人同形的即ちアウガスチンの有神説の葬鐘は、已に響けりといふべし。されど此の形式の有神説は、今や人類の發達に伴はざる不完全のものなるを思へば、我等必ずしも騒ぎ立つるを要せず。科學と宗教との衝突の觀を脱離するは、却て是れ人類の受けたる最大利益中の一と謂はざるべからず。是れ神學を進捗し、宗教を刷振すればなり。又人類間の深切と互助心とを増すの益あればなり。已に宇宙的有神説即ちアタナシア斯的有神説の採用より斯る好結果の顯はるべしと

せば、此の高等有神説が近代の知識に如何なる關係を有するかを一層特別に研究すると、その順序なりといふべし。

余の已に前にも論じたる如く、如何なる有神説にも、神人同形的分子は、之を避け得べきにあらず。若し一方より論ずれば、我等が人類の人格性として知れるものを無限的の神に歸するは、是れ自家撞着と謂はざるべからず。蓋し限りなきの人格性なるものは、思惟し得べきにあらずればなり。されど亦他の一方より論じなば、全然神人同形説を神の觀念より排除するは、神の觀念其れ自らを滅却するものなり。さればとて、我等は此の困難のために失望すべきにあらず。是れ斯くの如き問題の發端に必ず出會すべきものなるが故なり。我等は、神の目的を説明するに於て、廟算已に一決せる夫の自然神學者の如き精神もて、此の問題を討究せんとするものにあらず。我等は「鏡をもて見ごとく見

どころ昏然<sup>おぼろ</sup>なるを自覺す。又極めて表號的にするの外、彼の如くに神の思想を考ふることを預期せず。我等が無限者を研究するは、我等の觀念力に超然せるものたるを自認しつゝ、研究するなり。我等の觀念構成力は、經驗に限りあるが故に極めて小に、而して我等の經驗は、境遇に制限せられざる人格性て、觀念の材料を供給することなし。此の故に我等は斯くの如き觀念を思ひ浮ぶると能はず。さはいへ、我等若し斯くの如き觀念を思ひ浮べ得ば、即ち之に應ずるの實體ありとの意にあらず。思ひ浮べ得ると、然らざるこの試験は、只經驗の本たる現象界に適用し得ると耳。之を現象の背後に存するものに適用し得べきにあらず。余は、此の理由を以ての故に、思想と言語の明晰を旨とする哲學の講究上、『無限的人格者』といふが如き語を用ゆるを可しといふにはあらず。否余は却て神に心的性質ありといふも、何の妨げもな

きと断言す。是れ絶対無限といふが如き性質は、到底我等の適切に  
観念し得ざるものなるを以てなり。

此點は、有神説に取りては、非常に大切のものなり。カントも言へるが  
如し、曰く、「神の観念は、万物の永遠的根元としての盲目的自然といふ  
を含まず。却て自由的、知的の行動によりて万物を作れる無上者と  
いふを含む。而して我等に興味あるものとし、いへば、只この観念あ  
る而已」と。こゝに注意すべきは、カントがこゝに「計畫」てふ語を用  
ざりしことなり。カントは「自由的、知的の行動」てふ語を用ゐて、今余  
の神に心的性質ありといふと同一の事を意味すと覺し。而して彼は  
斯くしてこそ初めて有神説に興味あるなれといふ。此の思想たる、極  
めて深奥のものながら、又何人にも平明なるとなり。夫れ人類の目的  
的本能なるものは、抑へんとするも抑へ得べからず。非認せんとする

も、非認し得べきものにあらず。此の廣き宇宙に、一の友人もなく一の  
親戚もなしてふ思想は、人の靈魂の恐れて戰栗するところなり。否事  
物の構造に道理ありて存すべしとは、我等の理性の要求なり。而して  
此の要求は、我等が幾何學の公論を承認し、又此の公論に反するものを  
拒斥すると同様、心性の積極的、不可抗的事實なり。如何ほど機巧の論  
法を以てしたりとも、宇宙の無限的維持者が、「我等を永遠の知的混亂  
に」陥らしむべしとは、我等之を信する能はず。苟も熱心の思想家にし  
て、終局的原因を求めざる人は、一人も是れあらず。而して之を求むる  
の念は、我等が客觀的實在を信するの信仰と等しく、共に鎮壓すべから  
ず。何物も我等をして宇宙は無意味の團塊なりと信せしむると能は  
ず。事件の連続には、よし不充分にもせよ、我等の測度し得る意味あら  
んとの信仰は、我等が五官の證據を信する信仰よりも却て深きものな

り。近代懐疑的の世にありては、斯くの如き信仰の根據を得る能はざるより、こは信すべからざる迷信ならんと、強めて自ら信せんとする人少きにあらず。されど此の中一人たりとも、之に成功するものあるや否や、覺束なし。

スペンセル氏の説によれば、實在の唯一結局の證據は、その永存なり。而して我等が根元的信仰の正否は、之を變更せんとするの舉に對し、嚴然として最後まで抵抗し得るや否やによりて知らる。果して然らば、宇宙に道理ありと信するの信仰は如何。此の信仰に應ずる實體は、果して外界に是れありや否や。人類が世界の内住者たる神に類似の點ありとするは、果して事の實際に於て、然るとなりや否や。

斯くの如き問題に答ふるの困難は、その根原、神てふ代表的觀念を構成するの不可能なるに於て存す。されど此の困難は、少しく表號的觀念

の力を假らば、實際上の目的に、差支なきだけに、之を排除するを得べし。

## 十二

## 表號的観念

讀者、願はくは、代表的観念と表號的観念との區別の意義に注意あれ。夫れ單の知覺の働きにて理解し得らるゝ單純の物体、即ち小刀の如き、書物の如き、卵の如き、蜜柑の如き、圓の如き、三角形の如きは、人の殆んど、若しくは全然、之を代表する観念を形成し得るものなり。即ち蜜柑が眼前に在る時の我念頭にある心畫は、又その在らざる時、殆んど精確に近きまで、之を我念頭に再生するを得べし。而して此の兩者の相違は、主として前者の比較的鮮明なるに反して、後者の比較的朦朧たるに存す。されど思想の對象たるものにして、その大きさと、其の複雑とを増し來れば、事情甚だ異ならざるを得ず。人若し如何ほど己れの住する

土地の事情に通じ、街衢、家屋、公園、樹木より、市民の容貌舉動等までも熟知したればとて、之が眞の代表的観念を作成するに能はず。一個の心畫に斯る詳細の點までも包括せしむるは、到底、不可能のとなり。蓋し心は、幾多の観念を併せ、以て其の市を代表するため、現象の間を彼方此方に徘徊せざるべからざればなり。されば今我れ、その市のことを語るに方り、我心に顯はれ來るものは、其實その市の幾分だけ、を代表する零碎的観念に過ぎず。但し、充分の勞を用ゐて、幾多の心畫を次ぎ合せなば、遂にその實物に近きものを代表し得るは、是れ我勿論熟知するところなり。之を要するに、此の零碎的観念は、その市の表號として我心に存立す。而して或程度までは、該観念も代表的なれど、その大部分は表號的なり。若し夫れ、思想の對象にして、是れよりも尙ほその大きさと、その複雑とを加へなば、我等の観念は、愈々益々其の代表的性質を失ひ、

## 十二 表號的観念

讀者願はくは、代表的觀念と表號的觀念との區別の意義に注意あれ。夫れ單の知覺の働きにて理解し得らるゝ單純の物体、即ち小刀の如き、書物の如き、卵の如き、蜜柑の如き、圓の如き、三角形の如きは、人の殆んど、若しくは全然、之を代表する觀念を形成し得るものなり。即ち蜜柑が眼前に在る時の我念頭にある心畫は、又その在らざる時、殆んど精確に近きまで、之を我念頭に再生するを得べし。而して此の兩者の相違は、主として前者の比較的鮮明なるに反して、後者の比較的朦朧たるに存す。されど思想の對象たるものにして、その大きさと、其の複雑とを増し來れば、事情甚だ異ならざるを得ず。人若し如何ほど己れの住する

土地の事情に通じ、街衢、家屋、公園、樹木より、市民の容貌舉動等までも熟知したればとて、之が眞の代表的觀念を作成するに能はず。一個の心畫に斯る詳細の點までも包括せしむるは、到底、不可能のとなり。蓋し心は、幾多の觀念を併せ、以て其の市を代表するため、現象の間を彼方此方に徘徊せざるべからざればなり。されば今我れ、その市のことを語るに方り、我心に顯はれ來るものは、其實その市の幾分だけ、を代表する零碎的觀念に過ぎず。但し、充分の勞を用ゐて、幾多の心畫を次ぎ合せなば、遂にその實物に近きものを代表し得るは、是れ我勿論熟知するところなり。之を要するに、此の零碎的觀念は、その市の表號として我心に存立す。而して或程度までは、該觀念も代表的なれど、その大部分は表號的なり。若し夫れ、思想の對象にして、是れよりも尙ほその大きさと、その複雑とを加へなば、我等の觀念は、愈々益々其の代表的性質を失ひ、



遂には、純然たる表號的のものとなり了らん。例せば地球てふもの、如き心畫は、たとひ近似的にもせよ、一人の之を形成し得るものなし。たとへば、直徑八千哩の單の圓球にても、餘りに大きくして之を表號的に思惟し得る而已。然るを況んや我等の生息する無限無數の多形多様を含める地球をや。我等は只一の圓球を想像して、之に若干の地的屬性を衣せ、而して此の零碎的觀念が我等の心に假りにその職務を果たし置くのみ。

是れより更に進みて、或は宇宙、或は光及び熱の如き宇宙的勢力、或は近世科學の我等が考慮を促がす諸大變革に至れば、事情一層著しきものあり。即ち我等の觀念は、是等諸物体を代表すると能はず。却て純然表號的のものとなるは、猶ほ幾何學者が、曲線の形を顯すに代數方程式を用ゆるに似たるものあり。而も證明の手段にして、我等が掌中に存

する限りは、是等の表號的觀念を用ゐて恰かも、其の代表的觀念を用ゆる如くに、安全に推理するを得べし。見よ。幾何學者は隨時その方程式を實の曲線に翻譯し、以て其の推理の結果如何を判定す。光の波動説の如き、化學者の分子觀の如き、その他、我等が自然上の知識を一變せし近代の諸新説の如きにありても亦然り。只表號的觀念使用の危険は、天地間の何物にも照應せざる不當の表號を形成するの危険にて、即ち科學界に於ても、哲學界に於ても、短命なりし諸説の如き是れなり。乞ふ我等此の危険を豫知して、亦豫め之に對する防備を整へ、以て科學的哲學が宇宙の中、又宇宙を介して顯せる大能につき、言ふ所のものを研究せん。

## 十三

## 現象の永遠的淵源

人の未だ神の觀念に達せざるに先だち、換言すれば、古代の幼稚零碎なる多神教より純粹一致の有神説の發現せざるに先だち、よし不完全にもせよ、宇宙を全体として推理し得るだけに物質的概括力の進歩し居らざるべからざるは、是れ余が前に已に論じたる所なり。人初めて神は一体なりてふ觀念に達したるは、微かながらも自然界の一致を瞥見せし時にあり。而して彼等の現象的事實の知識愈明白となればなる程、その背後にある實體的眞理を會得すること、亦益々堅固となる。さて人類の知り得べき全宇宙は、廣大なる統一體にて、只一道の生命その各部を貫通すとは、是れ近代科學の傾向が、我等に確信せしめんとする

眞理なり。此の結論たる、慧眼以て物質調和の意義を看破せしスピノザの如き、ゲーテの如き預言的思想家の夙に其心に蓄へ居たるものなるが、既往五十年間に、稍詳らかにそれが事實上の證明を受くるに至れり。例せば、ニュートンの重力法が從來定星と稱せられたりしものにまで及ぶことを證明せられしは、ゲーテの死後に於てなり。而して事理應さに斯くの如くなるべきは、其時已に殆んど明瞭なりしに拘らず、一千八百三十五年に至るまでも、尙ほコントの如き科學者ありて、こは證明し得べきものならずと謂へり。然るに自然界の一致を證明するには尙ほ是れよりも一層有力のものあり。そは發光依帖兒エーテルを、勢力と勢力との關係の發見といふ點より見たる時、是れなり。此の廣大無邊の空間は、もはや虚無のものといふべきにあらず。否却て秤量測定し得べき諸物質と全く相異なれる驚くべき物質もて満たさる。而して此

の宇宙的糖漿ともいふべき物質は、無限に堅く、無限に弾力質を具へたるものなれど、之と同時にまた天体の運行に何等の抵抗をも與ふるものにあらず。その多感的なるたとへば、その何れの部分に衝動を與ふることも、『無数の世界の表面に振動を與ふ』るほごなり。又此の物質は、無数の物体を中心として、其れより四方に放射し、その振動は、或は熱或は光、或は光線作用、或は磁氣、或は電氣の如き、無数の變態となりて顯はる。又その空間にありて交互相錯せる状態は、恰かも神經線の互ひに集まりて網状をなせるが如く、而して其の運動は永く調和して、何物も之を紊亂すること能はず。斯くして宇宙の各部が、他の部分の活動と相呼應すること、例せば、太陽の大氣が華氏一百万度の熱度に於て振動すれば、微風直ちに地上の各磁針に影響する時の如きものあり。尙ほ是れよりも一層有力なる證據は、驚くべき光線解剖上の發見是れ

なり。我等この新知識を抱きて望遠鏡を取り、以て天体を眺むる時は、その何れの部分にも、現世紀中に我等が此の地上に於て發見せしと同様の化學的分子を發見せざるることなし。或はアークツラス星の如き、或はプレイアド星の如き、我が地球を距ること極めて遠く、最速の光線といへども、尙ほ數年を経ざれば我に達せざるに拘らず、我等はその中にある水素、酸素、鐵の蒸發氣若しくは、『ソヂューム』等を見分くるを得べし。斯くの如くにして、我等は、我視線内に落つるだけの宇宙の何れの部分にも、化學的成分の一致を發見す。星雲といひ、定星といひ、遊星といひ、是れ皆同一の材料より成れるものにて、東西南北已に成りたるものもなれば、未だ成らざるものもあり。又將さに成らんとするものもあり。こゝに不規則なる星雲の會て我太陽系統の然りしが如くなるものありと思へば、彼處にはまた回轉によりて楕圓狀となりたる星

雲あり。青黄紅紫星の色の異なるは、その化學的進化の程度相同じからざるを表し、土星の如き、木星の如き、今尙ほ幾分か白熱状のものあれば、火星の如き、地球の如き、太氣已に冷かに、土地已に硬結し、海波茫茫たるものもあり。而して又太陰の如くに、蒸發氣もなく、冷却して枯死し果てたるものもあり。

次に我等進化の法則が、是等諸の世界を通じて同一なるのみならず、亦諸他の現象を通じて同一なることを思へば、更に切に自然界の一致を感ぜざるを得ず。嘗に地球を初めとして、宇宙的諸物体の發達に於てのみならず、亦地球の表面にある生物の發達に於ても、人類社會と稱する複雑なる生命の發顯に於ても、一般的根本的の道程は決して不同なく、随つて之を一の公式に言顯し得る程なり。殊に最も驚くべきは、此の公式はハーバート、スペンセルが一般的進化の諸現象を概括するに

用ひしものなるに、其實こは、一千八百二十九年に、フオン、パールが初めて有機体が卵子より發達するの狀を概括するに用ひたる公式より出でしものなること是れなり。最初有機界の諸現象に於て幾分か發見せられたる進化の法則が、その後諸他の現象にも應用し得べき法則と認知せられしのみならず、又此の應用によりて初めて完全一致の叙述を得るに至れりといふは、實に驚くべき大切の事實なり。他語以て之を言へば、全体としての宇宙は一部一點だも、生命に満たざる所なしとなり。されど此の生命とは、通常の狹意に於ける生命にあらず。却て廣意に於ける生命なるは勿論なり。斯くして生物、非生物とふ區別は、會て絶對的のものゝ認められしともありしが、今日にては、比較的の區別となり了れり。而して有機体に顯はれたる生命は、畢竟是れ一般的生命の特別の形に過ぎざるなり。

物質を以て死せるものとし、自動し得ざるものとするの觀念は、近代の知識の已に解脱したる舊思想に屬す。物理學の研究にして、何事か我等に教ふる所ありとせば、それはこの自然界に、不動沈靜といふが如きもの發見すべからずといふと是れなり。運動は間斷なく分子より分子に傳はり、無數の變形となりて時々刻々に再現し、而して此の運動に伴ふ分子の排置變更は、事物の質的相違として顯はれ來る。今や物理學の用語を以てすれば、凡て物質の運動は、皆是れその始めと終りとを知るに由なき勢力の發現なり。物質は之を破壊し得べからず。運動は、永續的のものなり。而して此の兩真理の下には、勢力永存てふ根本的真理ありて存す。此故に、ハーバート、スペンセルが一般的進化の法則は、勢力永存の必然的結果なるを證明したる時は、即ち是れ科學が古來未曾有の大發展を遂げし時なり。こは我等に示すに、宇宙間無數の現

象と、小は刻々より大は年々に至るまでの奇怪奧妙なる諸變化は、無限にして且つ永遠なる或る活物の發現なるを以てせり。果して然らば、我等は此の宇宙の活物、此の現象の永遠的淵源を呼ぶに如何なる名稱を以てすべきや。物理學普通の語を以てすれば、我等たゞ之を勢力と呼ぶ。されど此の勢力てふ語は、我等を啓發するものにあらず。即ち此の語は、絶對にては、無意義のもの、之を相對上より用ゆるに至りて、初めてその意義あり。是れ猶ほ曲線を代表する代數式の如く、單の表號に過ぎざるなり。我等の用ゆる言語には、何れも皆微妙なる聯想の雰圍氣ありて、之を包めるにあらざるなし。随つて我等の往々意識せざる方面に、我等の思想を向はしむるとなしとせず。由て物理學には徹頭徹尾抽象的にして少しも人格性の含意なきと、猶ほ數字の表號の如くに使用し得る術

語ありたきものなり。而して勢力は即ち此の一なり。されど我等が今講究せんとするとは、科學的抽象力のことにはあらず。却て實在のうちの最も具体的最も堅硬のもの、凡ての外見の下に伏する一大實在にして、我等の免かれんと欲して免かるゝ能はざるものなり。試みに我等今抽象的の術語を一層具体的のものに翻譯したりとせよ。即ち永存する勢力といふ代りに、如何なる時、如何なる處にも、現象によりて現はるゝ能力の力を論ずるとせよ。さすれば其時の我等の問題は、此の無限的永遠的の能力は、如何なるものぞといふとなり。我等之を叙述するに方り、果して如何なる言を用ふべきや。我等果して之を「物質」と思ひ做し得るや。抑も亦その一般的、不体的の活動を呼んで、「盲目的必然」の働きと言ひ得べきや。我等今や問題の真核にまで到達せり。我等が存在の秘義に對する心的態度の如何は、専ら此の答に關係す。」

而して其の答辯は他なし。我等は無限的、永遠的の能力を断じて「物質」と看做すと能はず、其の働きは断じて「盲目的必然」に歸する能はずといふと是れなり。現象の永遠的淵源とは、我等の見聞覺知するものゝ淵源なり。又我等が物質と稱するものゝ淵源なり。されど、それ自らは、物質にあらず。物質とは、我等の外にある不可知物に關係する諸の變形物に與へし總名なり。曾て此の物質の諸性質は、皆心の之を假造せるものにて、心以外に斯くの如きもの實在するにあらずとせられし時代もありき。之を最も深き意味よりいへば、凡て眞に我等の知れるものは、只、心のみ。而してクリフワルドの言はんとせし如く、我等の呼んで物質的宇宙となすものは、單に是れ心中の眞宇宙の心畫に過ぎず。我等は、直接に我等の心を知る。我等は亦推測に由りて他人の心を知る。而して我等の心にも、亦人の心にも外物たるものは、兩者に似たる

意識の状態の原因なるものにて、感覺より隠れたる能力なり。斯くの如き意識の状態を我等呼んで物質的性質といふ。而して物質とは、斯くの如き性質を集めたる總額に外ならず。此故に此の隠れたる能力のと呼んで物質といふは、實に不實のといふものたるのみならず、又無意味のといふものなり。我等永遠的の實在を思惟するには、我等の知れる實在の語によりてせざるべからず。然らざれば一切之を思惟せざるに如かず。されど全然之を思惟せずといふは、明かに是れ不可能のとなり。我等が呼んで物質的宇宙と稱するものに遍滿せる能力を我が意識より排除せんとするは、猶ほ我等が呼吸する空氣より脱出せんとするに異ならず。而して只健全なる一結論は、此の能力即ち「我等にありては意識となりて泉み出づるものなり」てふことある而已。

さすれば原人の自然崇拜は、その思想幼稚にして朦朧不明なるを免かれざりしと雖も、その中には近世哲學の承認し反覆せざるべからざりし眞理の萌芽具はり居たりしなり。今や自然界の一致は全く證明せられたるが故に、曾て一たび心的のものとして神視せられたる諸の有限なる能力は今も尚ほ心的のものと視做さるゝ一箇の無限なる能力中に概括せられたり。さすれば極めて幼稚なる多神教より我等は徐々の進歩を経て、遂に純粹の一神説にとは到達せり。一神説とは他なし、我等がその内にありて活き又動き又在るを得る、宇宙の内住者なる永遠の神を認むる、是れなり。されど斯く神を心的のものと認め、又最深の意義に於て人類の靈と關係ある實在者と認むるに於て、注意し居るべき一事あり。他なし、不注意にも、制限若しくは荏弱の意義ある人類特有の心的屬性をも、又神に

歸し奉ると是れなり。我等は預言者イザヤの警告を忘るべからず。曰く、「わが思はなんぢらの思とことなり、わが道はなんぢらのみちと異なれり、天の地よりたかきごとく、わが道はなんぢらの道よりも高く、わが思はなんぢらの思よりもたかし」と。例せば全知の如きは、何れの有神説にありても、必ず之を神に歸し奉れるものなり。されど既往、現在、將來の凡ての出來事が、皆同時に現在し得てふ心的性質に至りては、天の地よりも高きが如く、有限的、逐次的なる人類の心性とは、頗る相懸隔せるものなり。此故に我等は、神人同形主義の或る神學者の如くに、專斷にも神の聖旨、神の目的の性質を、立ち入りて調査するが如きとなさざるべし。されば人類宗教性の要素たる終局原因を求むるときにつき、何事をもいはずとすれば、我等その業を全くせしものと謂ふべからず。否我等は尙ほ宇宙に道理あるを示さざるべからず。また事

件の秩序的進行に、人知に訴ふる意義あるを示さざるべからず。かの不精確なるバレーの方式を取らずとするも、尙ほ能くバレーの目的とせるが如き目的に進み行くを得べし。たゞ我等の研究しつゝあるは、表號的觀念にて、問題の點は之に應ふる實在ありや否やといふにあるが故に、注意肝要なり。此の問題は、難問なり。されど我等は、進化論てふ有力の助勢を有す。殊にそのダーウイン説と名くる部分より得るところ、大いなり。奮はざるべけんや。



十四

義を進捗する能力

意匠論を顛覆したるは、ダーウインの自然淘汰説なりと雖も、而も余が他所に論じ置きし如く、「人の運命」九十八頁充分之を了解したる場合には、その破壊するだけに、又目的論を補償するものなるを見るべし。げに進化論なるものは、徹頭徹尾一定の目的論的方面を有す。只之を用ふるの方式、かの終局原因論の勇將等の手にありて、往々誤解の基となりしと異なるのみ。進化論は事の或る排置が、善良の目的を進捗するにあると分明せし場合に、直ちに、之を科學的に説明せられしものと見るとをせず。却て斯る排置を將來するに與かりて力ありし其の前事情の説明を得んとを努む。さはいへ、進化論は亦絶えず自然界の諸排

置が進捗せし目的を我等に示す而已ならず、之と共に又、その本領の大區を通じて、或る戯曲的傾向あるを示す。換言すれば事の進歩が一大目的に向ふとを示す。さて茲に我等の注意し置くべきは、此の大區が、實は我等の想像力の及ぼし得る只一つのものなるとなり。天學上の宇宙史談は、我等の知力に過ぎて餘り廣大なるが故に、戯曲的傾向ありや否や、之を窺ひ知り難し。されど我等が現象を知り得る唯一の場處たる此の地上の生物進化史談に於ては、凡ての物經營慘憺無數の年月を通じて、或る一定の目的を達するため、協力せしを認む。此故に我等の探檢若し此の廣大無邊なる天体に輝く多くの世界史談を知るにありとするも、尙ほ能く同一の意義を發見せんといふは、或は大膽の恐れなしとせざれども、必ずしも不當といふべからず。之を要するに、我等の解釋し得る史談は、我等に感動と慰めとを與ふるものにあ

らざるはなし。蓋しそは能く我等の有神的信仰に表するに道德的の意義を以てし、亦宗教の切實森嚴なる現實を開闡し、又大喜悅の福音を以て我等の心を満たせばなり。

有機的の進化が傾向しつゝある大目的とは、即ち最高最完全の心的生活を産出するとは是れなり。而して此の結論の萌芽は、已にダーウインの自説中に存したりしなり。只人心一時彼れの説の他方面を窺ふに忙殺せられて、之に氣付かざりし而已。或は種の生存に資する箇人的特性の自然淘汰に於て、或は豊富多様の生活力を有する高等動物の進化に於て、著明なる戯曲的傾向の存するあり。而して之を終幕に達せしむるため、世界開闢以來、無量の小行爲の一々が、何れも貢献する所ありしを發見するを得べし。さすれば此の仕組全体は目的論的にして、又自然淘汰の一々は、目的論的の意義を有す。是れ進化論がかくも速か

にバレーの説を破壊し了りたる所以の理由なり。進化論は嘗にバレーの説を否定する而已ならず、却て真正に科學的なる説明を以て之に代へ、之と同時にまた、自然神學が從來、射中てんとして未だ成功せざりし的を射中つるものなり。

以上は、ダーウイン説が初めて世に出でたる時の事情なりき。されど一層深く研究を積みて、之を人類の起源に適用するに方り、進化の意義驚くべく判明し、前に曾て見へざりし宇宙の道理も發見せられたり。即ち人類の起源は、自然淘汰作用の方向一變し、生理的相違の代りに、心的相違が淘汰せらるゝに至りしに由來すると判然せり。亦此の一變の重なる結果は、幼穉時代の延長にして、人類は之がため、無限の心的進歩力ある未成動物として、世に出づると判然せり。又幼穉時代延長の重なる一結果は、未發達の道念と道感とを備へし家族及び人類

社會となりて現はれしと判然せり。又是等の諸項、其力の結果として、人類と下等動物との相違は諸他の相違に超えたる種類の相違たるに至りしと判然せり。又人類の地上に出現せしとは、進歩の道程の末段の初めにして、創造てふ大戯曲の終幕なると、諸他の進化的事業は、斯く不思議に生出せし動物を完全ならしむるに存すると判然せり。又人類を完全ならしむるは、主として靈魂の生命を肉体の生命よりも重からしむるに存すると判然せり。最後にまた、人類進歩の初段は、他の下等動物發達の場合と同様、生存競争を以て其の特色としたりしも、自然淘汰の人類に及ぼす作用は、將に終局せんとし、その將來の發達は、その驚くべき未成的の知力を、其の境遇に順應せしめて初めて成功すべきと判然せり。此に於てか戦争その他凡ての闘争は、已にその効を失ひ、不必要のものとなりたるが故に、漸次廢滅すべきと、争闘の時代に適し

たる感情と習慣とは、不用のために遂に滅亡すべきと、人類同情の外には何物もなき文化の程度の到達すべきと、キリストの精神は、地の端より端までを支配するに至るべきと等、自ら顯はれたり。凡そ是等の結論は、その根據と共に、已に之を「人の運命」と題せし書中に簡単に之を示し置けり。こは或人には奇矯と見ゆべしと雖も、必ずしも、此の前古未聞の時代に發見せられし諸他の眞理よりも特別に奇矯なるにはあらず。否そは却て、進化論の發揮せし極めて大切の事實より廣く歸納したる結果なり。而して此の諸結論は、時代の試験に及第し得べき哲學論の精髓といふも過言にあらず。又是れ余が有神論の眞性に關する論法の結論なり。是れ近代の知識に影響せられたる神の觀念に新意義を添ふるのみならず、之と同時にまた、懷疑論のため屈服せらるゝの恐れありし在來の諸眞理に代り、辯明の勞を執るも

のなり。その故、他なし、我等若し人類の起源と運命とに關する是等諸結論の意義を約言せば、古今ともに宗教を活動せしめたる根本的觀念と感情の共に是なるを知り得らるゝが爲めなり。我等は人類が今も尙ほ宇宙の冠冕たり、榮光たり、神の保護の本目的たるを知る。然るに又之と同時に不具不完の動物にて、原罪てふ野獸的の遺傳を備へ、その最後の救は、徐々道德的の鍛鍊を経て、初めて成功すべきものなるを知る。我等また人類を産出せし重なる作用(即ち争闘をその媒介となす自然淘汰作用をいふ)が、もはや人類の上に働かざるに至り、随つて人類の争闘全滅に至るまでは、其の高等の衝動と劣等の衝動との間に、競争絶ゆるとなく、遂に高等の衝動、勝を得るに至るべきを知る。而して是等凡てのとは、何れも、正しき生活をなすための最強刺激劑にあらずるはなしと雖も、その精神に於ては、人類をして初めて眞理を知らしめ

し大教師の所説と異なる所あらず。

さて近代の知識が認可する神の觀念に關しては、余の前來論じたるころ、活ける神に代ふるに、空虚の公式、哲學上の抽象を以てするにあらざるを示すに於て、充分ならんと思はる。宇宙の一舉一動に顯はるゝ無限永遠の能力は、是れ即ち活ける神に外ならず。我等若し此の神の性質が、如何なる程度まで、人類の心性に適用し得る語にて言ひ顯し得るかを論じなば、哲學の凡ての力を傾注するも尙足らず。されど、こは徒勞にして、只我等有限の觀念に余れる問題なるを示すに終らんのみ。されど我等は、尙ほ幾分か確信し得べきとあり。即ち人類は渾沌無目的なる宇宙的變化中の局部的出來事にはあらずといふと是れなり。宇宙の事件は、一も偶然にはあらず。又旨目的必然の結果にもあらず。實際世界には目的ありて、我等之を科學的に記述し得ると得ざるに

拘らず、能くその教訓の存するところを學ぶは、即ち我等最高の義務なり。我等此の世界に生物ありてより以來、万物共力して人類最高の精神性を進化するに勉むるを知らば、たとひ口に之を顯す能はずとするも、心に神は最深の意義に於て道德的實在者なるを信す。噫、現象の永遠的淵源は、義を進捗する無限的能力に外ならず。汝神の深事を窮むるを得ず。されど汝、彼に依頼め、陰府の門は之に勝べからず。そは永遠者にむかひては、知慧も明哲も謀略もなすところなきが故なり。

## 甲註

## 野蠻人の考へ

存在の大秘義に對しては、教育なき野蠻人の思想、必ずしも、文明人のそれと非常の相違なし。こは左に引用せるカフイヤ人セケスなるものが、基督教に關して佛國旅行家アールブルセユなるものと對談せし中の憐れむべき語によりて知らる。即ち此の無教育の蠻人曰く、  
 『貴下の福音は我要するところのものなり。余は今貴下に語らんとする如く、貴下を知らざりし以前より、之を求めつゝありたるなり。此今より十二年前、余は一日、羊群を牧せんとて外出せしことあり。此日天氣は晴朗ならざりき。余は岩の上に座し、愁然として自問するく、然り余は愁然といふ。是れ自ら此の自問に答ふる能はざりし故

なり、誰かその手を以て星辰に觸れ得るものぞ。此の星辰は何の柱の上に立てりや。流水曾て疲れず。滾々朝より夕に至るまで、夕より朝に至るまで、間斷なく流るゝことを知りて他を知らず。されど流水果して何處に留まり、亦何人が斯く之を流れしむるや。雲亦來り且つ往き、而して時に地上に雨を降らす。彼等何處より來り、何人が之を降らすや。卜者は確かに我等に雨を與へず。若し與ふとせば如何にして彼等は之を與へ得るぞ。又何故に彼等之を取らんとて天に昇り行く時、我等の目には觸れざるぞ。我は風を見ること能はず。而も風は如何なるものぞ。何人が之を持ち來り、之を吹かせ、之を蘇かせ、又我等を驚かすや。我は如何に玉蜀黍が發芽するかを知るか。余は昨日、我が畑に一莖をも見ざりしに、今再びこゝに來れば、若干の發芽せるものあり。何人が之を生すべき知慧と力を地に

與へたりや。斯くて余は暫し我が兩手に我顔を埋めて默考せり」と。  
 『物質の秘義』二百二十二頁より引用

乙註

神の名

神ゴットてふ言に就ては、何れの辭書にも、充分の説明見へず。一時或は善グッドといふ形容詞と關係あらんとせられしことありしも、グリムは久しき以前已に此の關係甚だ疑はしきものなることを示せり。その後之を波斯語のユダー、波斯古語のクワダタ、梵語のヌワダタ、羅匈語のアセダタス等何れも自存の意義を有するものと同一ならんとせられしも、アウフレヒト此の奇説を破壊し了れり。かのドナルドソンが英語のゴッドは希臘語のカロスと、希臘語のセオスは同語のチセミと關係ありとなすが如きは、牽強附會の甚しきもの、今日之を説くの價值なし。近時の一層科學的なる博言學者中にありては、アウガスト、フイツク「獨逸語

彙』を論ずるに方り、單にゴッドをチユートン語のグタに關係ありといふ而已亦その他を言はず。次に亦スキートは之に加へて、「グードと關係なし」といへり。エツアルド、ミユールは「グードとの關係疑問なるが如くに、波斯語のユダー、梵語のグドハ、若しくはグッドハとの關係も疑問なり」と言へり。

マックス、ミユールの説は、稍信すべきものなるに似たり。即ちゴッドは素と異教徒の神を呼ぶの名なりしに、基督教徒の使用に移りたるを猶ほ羅匈語のデウスと同じと。余この説に基きて、數年前曾て言へることなり(千八百六十九年)曰く、ゴッド God は北人の神にして亦我等が祖先の本尊たりしウオダン Wodan 若しくはオチンと恐らく同一なるべし。冠字のと冠字との關係は極めて普通のものなり。(中略)而して嘗に此の關係が普通なるのみならず、ウオダンの場合に於て、そ

の特別の例證少からず。獨逸に「ゴデスベルグ、グデンベルグ、ゴデンスホルト」等の地名あり、何れも皆ウオダンてふ名より出づ。ウエストフアリアの方言にては、ウエンヌデー「ウオダンの日」即ち水曜日のことをゴデンスタツグ或はグンスタツグといふ。その他ライン沿岸の和蘭人はグデンスタツグといひ、フランデル人は、ゴエンスタツグといふ。ウエストフアリアのサクソン人は、グオダンとも、グダンとも書くの例あり。亦オチンはゴチンとも稱せらるゝことありて、パウラス、デアコナスは、ロンバーディー人がウオダンをグオダンと發音すといへり。斯く種々の證據あるより見れば、何故、今よりも前に此の語原に注意せられざりしや、余の驚く所なりと。

ウオダンは素と風の神にて、多くの點に於いて、希臘のヘルメス、毘陀のサラメヤスと相照應す。余の「神話及び神話作者」十九、二十三、三十二、三十三

五、六十七、二百二十四、二百〇四頁を見よ。又マツケーの「希臘及び希伯來の宗教的發達」一の二百六十一、二百七十三頁を見よ。

## 神の觀念終



明治卅九年十二月八日印刷

明治卅九年十二月十一日發行

(定價金參拾錢)

著者 シヨーン、ヲイスク  
譯者 田中達

發行者 堀田達治  
東京市京橋區銀座四丁目一番地

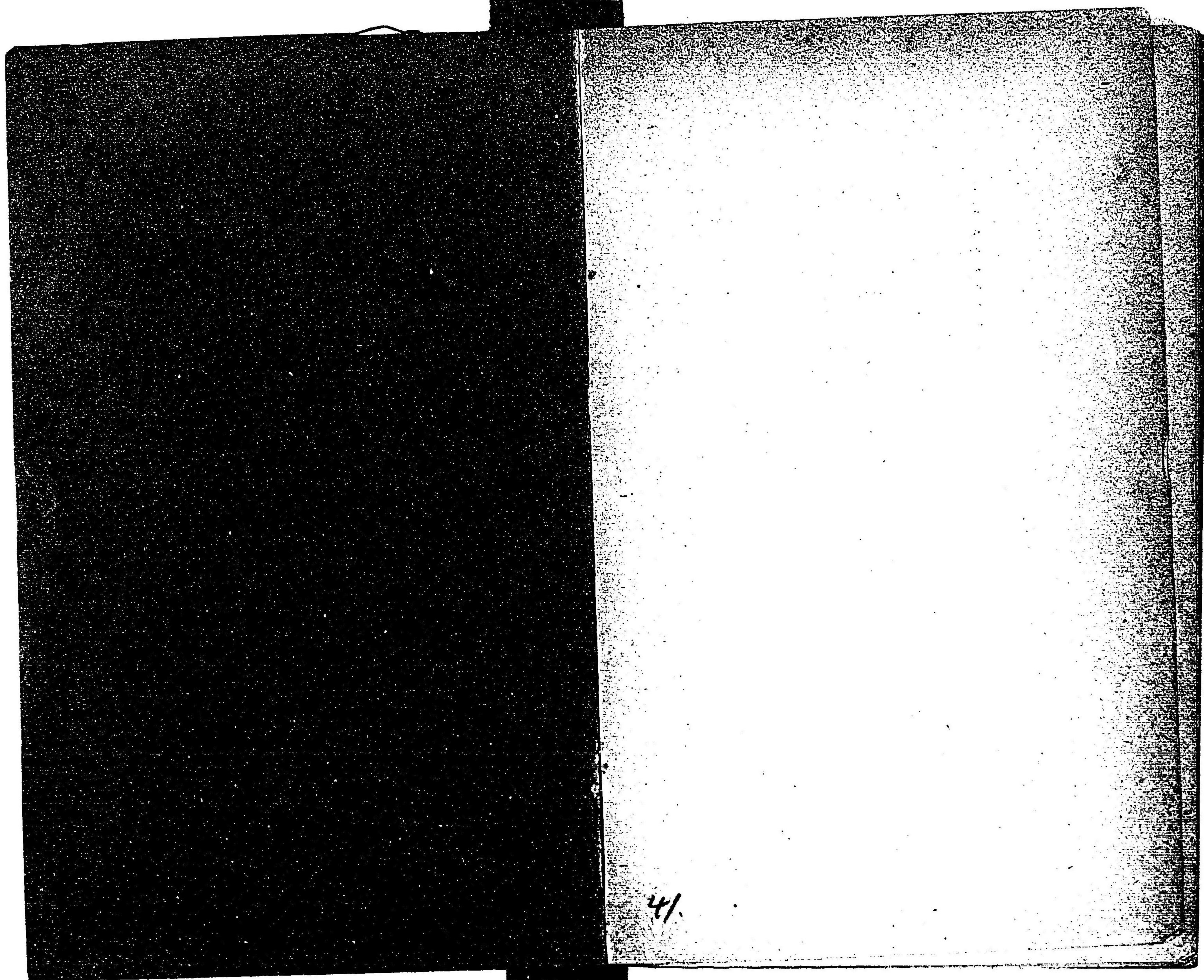
印刷者 ゼー、エル、カウエン  
東京市京橋區銀座四丁目一番地

發行所 教文館  
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所 教文館印刷所  
東京市京橋區銀座四丁目一番地

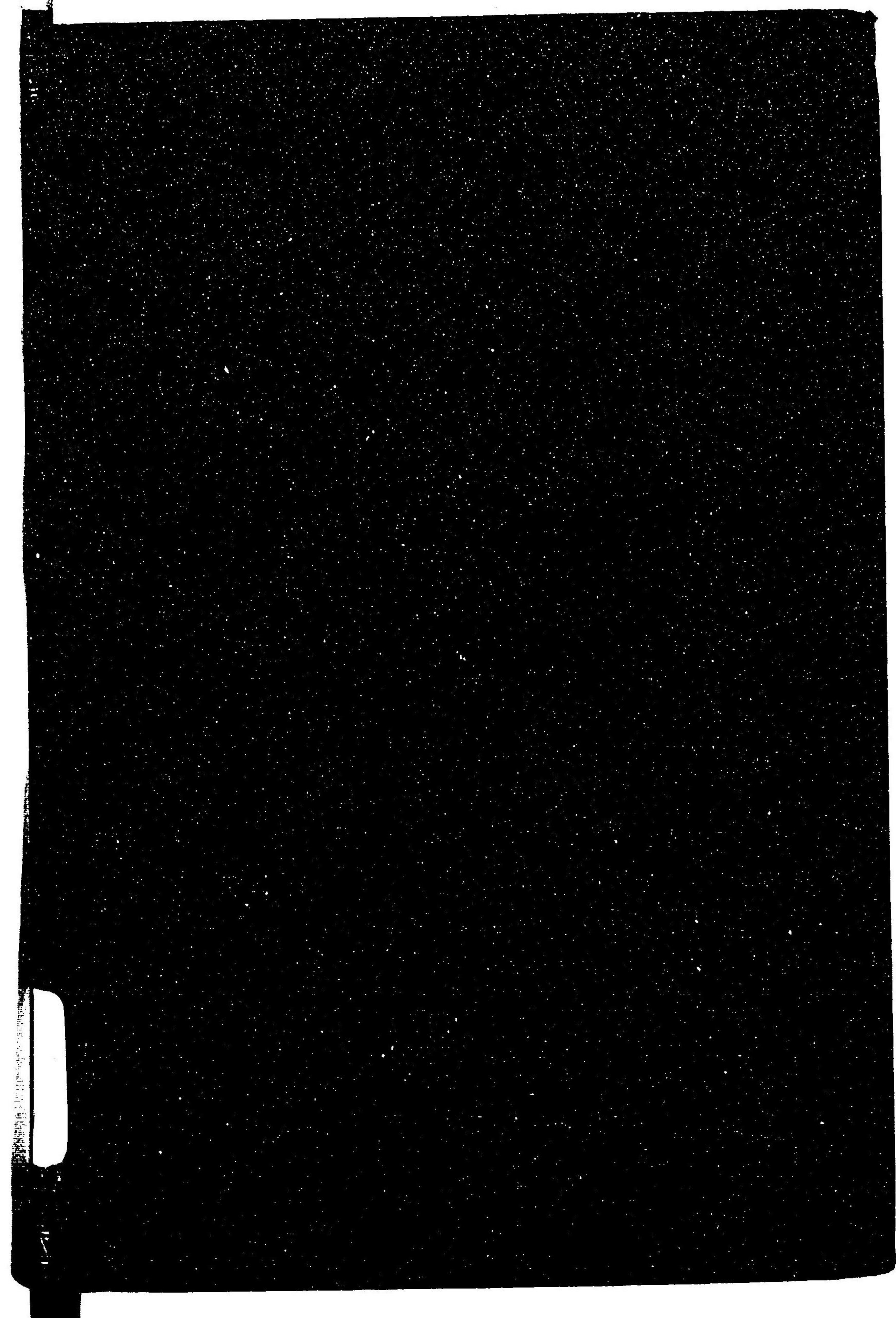


不許  
複製



41

97  
411





020336-000-3

97-411

神の観念

ジョン・フィスク/著

M39

ABI-0142



